

2020 年度 日本語教育実習報告書

東京女子大学

日本語教員養成課程

◇2020 年度 日本語教育実習報告書◇

～目次～

はじめに

日本語教育実習の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

「日本語教育実習」全体の流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

実習報告：学外実習（フィールド実践 B・C）

2020 年度 学外実習受入日本語教育機関・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

インターカルト日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

カイ日本語スクール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

新宿日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

ラボ日本語教育研修所（前期チーム）・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

ラボ日本語教育研修所（後期チーム）・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

実習を振り返って - 個人レポート概要

学外実践（フィールド実践 B・C）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

はじめに

本年度の日本語教員養成課程の授業は、コロナ禍の影響により全面リモートによる授業となりました。事前に十分な授業準備をする余裕もなく、担当教員にとっても初めての授業形態に戸惑い、右往左往しながら進めていきました。

日本語教員養成課程のハイライトである4年次の日本語教育実習は、例年ですと5月の連休明けから順次日本語学校での実習が始まり、夏休みにはチームに分かれて5日間の日本語クラスを企画・運営する学内実習を行います。しかし、今年はキャンパスに立ち入ることが出来なくなり、学内実習は中止せざるをえませんでした。毎年、約半数の学生が学内実習に参加しておりましたので、全員の実習機会を確保出来るだろうかと頭を抱えました。しかし、たいへんありがたいことに、毎年実習生として本学の学生を受け入れてくださっているインターカルト日本語学校、カイ日本語スクール、ラボ日本語教育研修所、そして今年新たに実習生を受け入れてくださいました新宿日本語学校のご理解とご協力により、全ての学生が実践の場を知ることが出来ました。日本語学校もコロナ禍の影響を大きく受けていらっしゃる中、本学の学生に充実した機会をご提供いただいたことに、心よりお礼申し上げます。

大学はキャンパス内立ち入り不可となり、授業は全面リモートでの実施となったため、実習だけでなく授業の形態・内容も変更を余儀なくされました。キャンパス内に学習者を集めて行う学内実習は中止となりました。授業内での活動も制約が様々生じ、初めは教員自身も戸惑うことばかりで苦戦いたしました。しかし、必ずしもマイナス面ばかりではないことに気づきました。普段は仲のよい友達のそばに座ることが多いようですが、リモートによる授業では、これまで話すことの無かった学生同士が同じブレイクアウトルームに割り当てられ、新鮮な気持ちで熱心に話す様子も増えたように思います。

リモートでの授業となったことで物理的距離や移動時間の制約を最小限にすることができ、対面授業では困難なリモートならではの活動を企画することもできました。

普段は座席も仲のよい学生同士になりがちのところ、グループワークも簡単に組み替えられるため、ディスカッションも新鮮味があったのではないかと思います。

また、外部の講師をお招きしてお話ししていただく機会を得ることができました。リモートにより学外からおいでくださる講師の先生にとっても移動の時間などご負担の軽減につながり、実現しやすくなりました。

実習報告会はいにくの大雨でしたが、これも、遠隔での実施の形態で行ったため、実習受け入れ校の先生方を始め、本学の実習に関心を持ってくださった方々が多数ご参加くださいました。これも、それぞれのご都合や関心に合わせて参加することができるリモートを用いたことの大きなプラス面を実感しました。

授業外でも学生たちによる任意のアクティビティとして、海外の大学教員や学生たちと

本学の学生がリモートで交流活動を展開し、対話の機会を世界に広げていく試みが展開されました。通常の授業とは異なる学びの広がりや、学生主体の活動としても展開が可能であることは、今後の日本語教育に様々な可能性をもたらすものと思います。

教室内での授業活動という枠組みで見ると、リモートでの授業は学生同士の顔が見えづらく、窮屈ささえ感じられます。しかし、視点を変えてみると、自分の位置から遙か遠くの場所に一瞬でつながることができます。時差の問題はありますが、海外とも国内と同様に容易かつ安価でつながることが可能であることは、これまで大きな障害であった「距離」を軽々と超えることが可能です。すでに、国や地域を超えた活動が活発に行われるようになっていきます。今年、学内実習の実施を断念しましたが、キャンパスに学習者を招くことはできなくても、日本在住に関わらず海外からの参加も可能な実習も考えられるかもしれません。

大きな不安の中でスタートした今年度の日本語教育実習は、これまでを踏襲することにとらわれず、新しい試みにチャレンジすることで、新たな地平からの景色を見いだす可能性が見えてきたように思います。十分な検討はまだこれからですが、日本語教育は世界とつながるための活動です。様々な壁もありながら、新たな可能性を感じることができたこの一年は、日本語教育にとって、新たな世界観を認識する機会となったのではないかと思います。多様なツールの利用が広がることで、視野が広がり、これまで見えていなかった、あるいは見ようとしなかったことについての気づきを得ることは大きな意味を持つものと思います。

最後になりますが、コロナ禍というたいへんな状況で、闘病等つらい経験をなさっている方が今も多数いらっしゃいます。1日も早く、世界各国で感染拡大が終息し、活力ある社会が戻ってくることを願います。

2021年2月吉日

日本語教員養成課程運営委員長
日本語教育実習担当

石井恵理子

日本語教育実習の概要

1. 日本語教育実習の目的

日本語教育の実際は、多様である。日本国内においても、日本語学校や大学等教育機関として長期的に日本語教育を行う場合と、中国帰国者や技術研修生等に対して短期間集中的に初期指導を行う場合、また地域の日本語教室のように地域を基盤として行われる場合とでは、日本語教育の目的や教育内容・方法等に大きな違いがある。また、たとえば日本語学校であっても、学習者の背景や、教育機関の設置形態、教育設備等の環境などさまざまな違いがある。国内と海外では、社会の言語環境など学習者や日本語教育の場を取り巻く環境も大きく異なる。そうした多様な現場において、教える立場に立つ者に求められることも当然同じではない。

この日本語教育実習では、大学を卒業した後、どのような日本語教育の場に関わるとしても、そこでの日本語教育が何のためにあるのかを考え、学習者や学習の場を取り巻く環境をよく見、そのうえで自分がどのような役割を担い何をすべきかを判断できる力をつけることを目標とする。

2. 日本語教育実習の構成

「日本語教育実習」は、以下の3つの部分で構成される。(図「日本語教育実習全体の流れ」参照)

① 事前準備

講義等による指導を受けると同時に、学習者のニーズや日本語教育の目的、学習環境などに関して事前に情報収集を行い、自分が関わる日本語教育の位置づけを理解し、自分の役割の明確化・実習の目標設定を行う。

② フィールド実践

実際に、日本語教育の現場で学習支援の活動を行う。その際、目標設定に合わせて、振り返りのためのデータを収集する。

③ 振り返り

自分自身の目標に照らして、フィールド実践がどうであったかを収集したデータの分析をふまえて振り返る。

学習者と直接向き合って学習支援を行う「フィールド実践」を中心に、事前に自分が関わる学習の場についての情報を得る「事前準備」を十分に行い、実践での各自の目標を設定すること、また実際に自分が行った学習支援活動について、自分自身の意識、学習者の反応、指導担当の先生をはじめとする受け入れ期間の人々からのフィードバックなどを踏まえて「振り返り」を行う、これら3つの部分全体をもって「日本語教育実習」とする。

※「フィールド実践」は通常は以下のA~Cの3つの形態で実施するが、今年度はコロナ禍の影響でA. スクール・シミュレーション型(学内での実践)は中止した。

A. スクール・シミュレーション型(学内での実践)

学内に学習者を集めて5日間の日本語コースを開設する。コース設計から、学習者の募集・選考、教案作成、授業実施まで、全てを学生が自主的に運営して行う。

B. 短期集中型（学外での実践）

学外の日本語教育機関において2週間程度、集中して実践を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

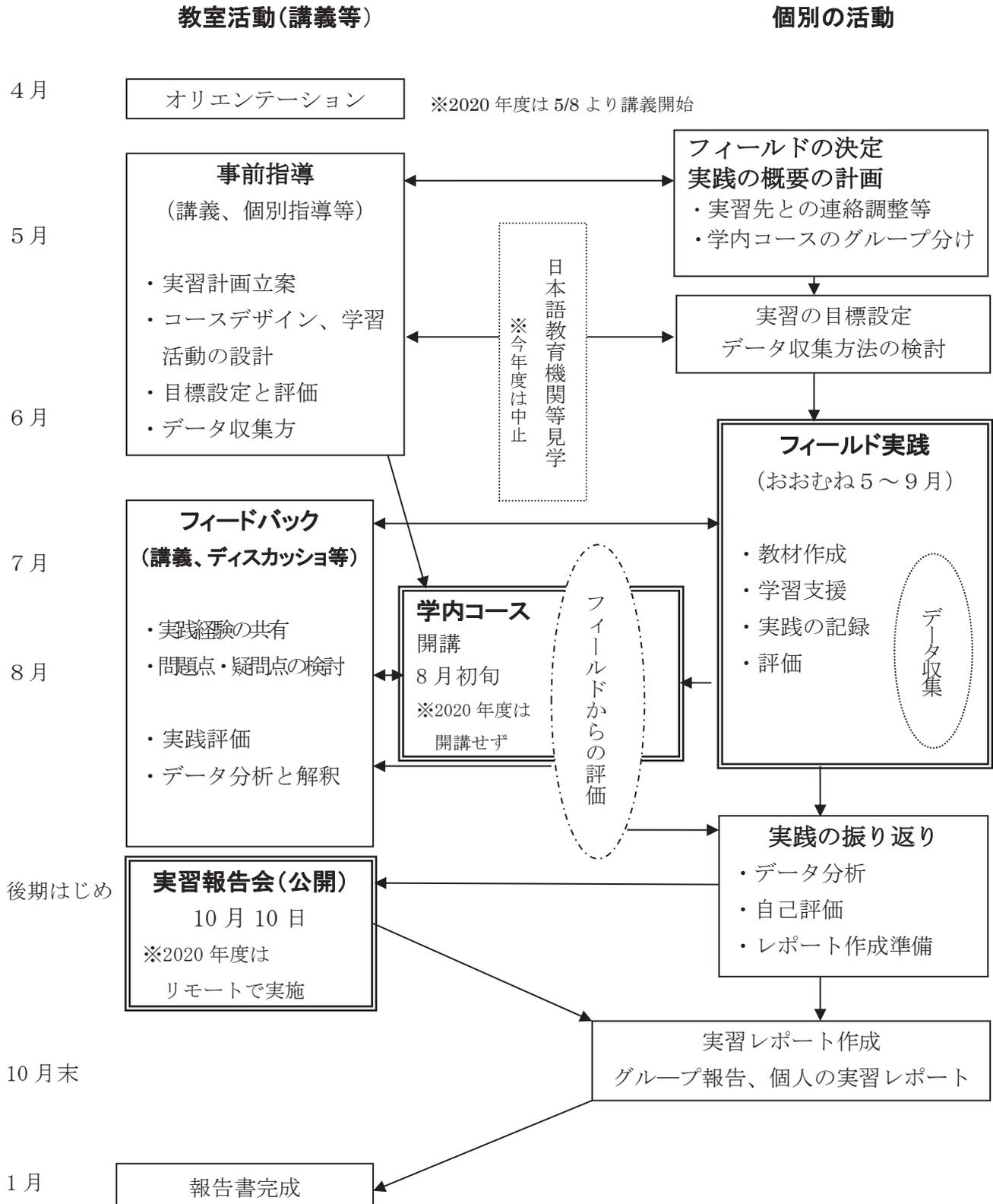
C. 長期継続型（学外での実践）

学外の日本語教育機関で、一つのクラスに一定期間（2～3ヶ月程度）継続的に参加する。いわばティーチングアシスタントとして、クラスを担当する教師と共に、授業に参加し、学習支援を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

フィールド実践と並行して行われる毎週の授業、あるいは実践終了後の実習報告会では、それぞれの機関での実践の経験をお互いに共有することで、自分が関わる教育現場（フィールド）の特性をより明確に理解し、そこでの活動の一つ一つが、何のために、なぜそのようなやり方で行われたのかを考える契機となることを促進する。それぞれの異なる経験を共有することによって、自分自身の経験をより広く深いものにすることは、教師に求められる重要な行動でもあるからである。

これらの過程を経て、実習についての報告をグループごと（学内実習はコースごと、学外実習は実習を行った機関ごと）に作成し、各個人の振り返りをレポートにまとめた。

【実習全体の流れ】



2020年度「日本語教育実習」講義スケジュール

担当：石井恵理子 ishii.eriko@gmail.com
吉本恵子 huizi.huizi.huizi@gmail.com

講義 全13回

回	月日	理 論	実 践
1	5月8日		オリエンテーション
2	5月15日	コースデザイン 1	学習者の背景を考える
3	5月22日	コースデザイン 2	学習者のレベルと初級授業
4	5月29日	日本語授業の流れ	授業の準備
5	6月5日	教材・学習リソース	教材・教具
6	6月12日	学習活動の設計1	日本語学習者の実際(報告)
7	6月19日	学習活動の設計2	初級から中・上級へ
8	6月26日	授業の観察・診断	初級から中・上級へ
9	7月3日	授業分析・評価	滝澤三郎氏(元国連難民高等弁務官事務所駐日代表) 講演:「世界と日本における難民の状況」
10	7月10日	<実習を開始したチームの実践報告、実習で得た知見や経験の共有>	
11	7月17日	<実習を開始したチームの実践報告、実習で得た知見や疑問点の共有>	
12	7月24日	<実習を開始したチームの実践報告、実習で得た知見や疑問点の共有>	
13	7月31日	<実習を開始したチームの実践報告、実習で得た知見や疑問点の共有>	

・実習報告会(公開)…10月10日(土)9:00～11:30 オンライン開催

◆実習報告◆

学外実習
(フィールド実践 B・C)

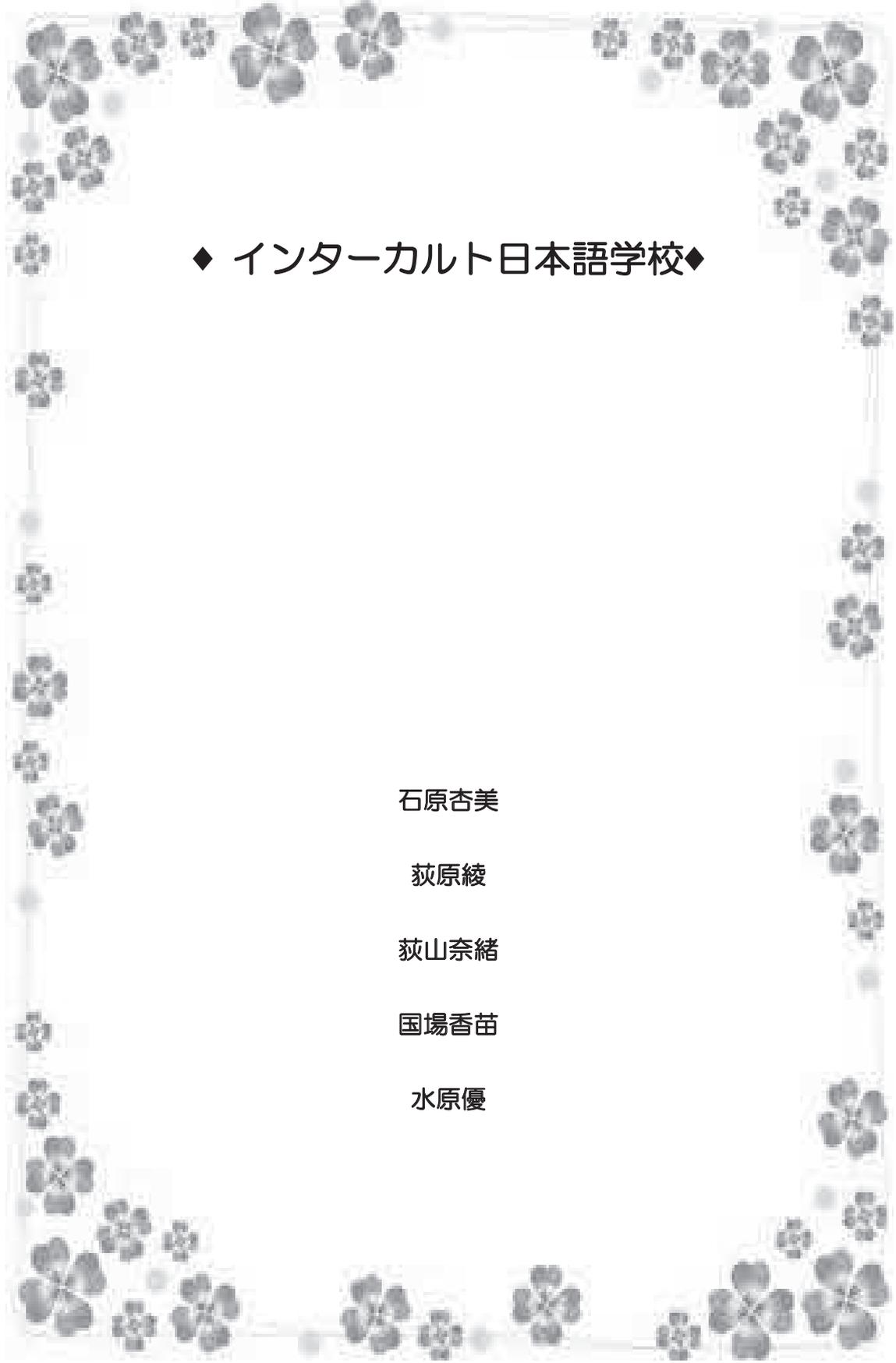
●2020 年度 学外実習受け入れ機関●

実習受入先日本語教育機関

- ・株式会社 インターカルト日本語学校 東京都台東区台東 2-20-9
- ・株式会社ケー・エイ・アイ カイ日本語スクール 東京都新宿区大久保 1-15-18 3階
- ・学校法人 江副学園 新宿日本語学校 東京都新宿区高田馬場 2-9-7
- ・財団法人ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所 東京都新宿区西新宿 6-26-11

実習期間

受入れ日本語教育機関	実習期間
インターカルト日本語学校	《短期》 9/7~9/18
カイ日本語スクール	《長期》 6/29~8/7
新宿日本語学校	《長期》 6/30~7/31
ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所 (前期)	《長期》 7/6~7/31
ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所 (後期)	《長期》 8/24~10/2



◆ インターカルト日本語学校◆

石原杏美

荻原綾

荻山奈緒

国場香苗

水原優

【インターカルト日本語学校の概要】

「日本語を学びたい全ての人に」という理念のもと、1977年に設立された日本語学校。日本語の学習を通して様々な価値観に触れる場を提供する「学習者にとってのプラットホームでありたい」という校長先生はじめ先生方のお考えのもと、学習者一人一人を尊重し需要に沿った学習の場を展開している。

実習当時は27か国170名の学習者が在籍していた。例年はさらに多いようだったが、今年度は新型コロナウイルスの影響が大きく、入学する予定だったが来日できなかった学習者が多いというお話を伺った。一番多い国籍は中国だが、アジア系からヨーロッパ系まで幅広い国籍の学習者が在籍している。

インターカルト日本語学校では、大きく分けて以下の3つのコースに分かれている。

- ・長期コース

今回実習させていただいたコース。留学ビザを取得し、1～2年日本語を学ぶ。

J1クラスからスタートし、3か月ごとの学期末試験の結果をふまえてJ2、J3…とレベルが上がっていく。

- ・ウィークリーコース

最短1週間から学習できるコース。実習時は新型コロナウイルスの影響で開校されていなかった。

- ・日本語教師養成コース

1978年から設立されたインターカルト日本語教員養成研究所にて開校されているコース。

現在までに2000人以上の日本語教師を輩出されている。ここで学ぶ人は「たまご先生」と呼ばれ、私たちもたまご先生として実習させていただいた。

実際に使える日本語を身につけることを目標とし、知識より実用を重視している。実際の授業を見学した印象としても、理論的なことよりもこの表現はどこで使うか、どのような表現を使えば自分の言いたいことが伝わりやすいかを例を交えながら教えている場面をよく目にした。

【実習内容】

- ・期間：2020年9月7日(月)～9月18日(金)の平日
- ・時間：主に昼食前後～17:30（1コマ45分、授業間の休憩10分）

初日に自己紹介ポスターを作成し、担当するホームクラスと教務室に掲示して頂いた。
ホームクラスでは実習生5名が5クラスに分かれて参加し、漢字クラスと目的別クラスでは全員または2チームに分かれて参加した。毎日授業終了時にはフィードバックの時間を設けていただき、感想や質問などを先生にお尋ねした。先生方から実習生向けに、学校の概要や授業方針、就職、就学についてのレクチャーをしていただく時間も多くあった。スピーチコンテストでは見学と審査をした。最終日に教壇実習があり、それを見据えてクラスの雰囲気や学習者の様子を見学した。以下は、実習期間中の実習生のスケジュールの例である。

11:15~12:05	目的別授業/生と死の日本語
12:15~13:05	
13:05~13:25	フィードバック
13:25~14:15	昼休み
14:25~15:15	ホームクラス
15:25~16:15	
16:25~17:15	目的別授業/発音トレーニングor食べ物豆知識
~17:30	フィードバック

13:25~14:15	レクチャー/進学について
14:25~15:15	ホームクラス
15:25~16:15	
16:25~17:15	漢字
~17:30	フィードバック

【ホームクラス】

ホームクラスの実習では、J1 レベルと J2 レベルに参加した。

まず、J1 の授業についてだ。J1 レベルのクラスは J1A と J1b に分かれており、1 クラスは 10 名程度である。国籍は様々で中国圏の方からヨーロッパ圏の方々までがいらっしやる。また、年齢層も幅広い。J1 レベルでは、みんなの日本語初級 I・II を扱う。実習をした際はみんなの日本語 1 が終了しており、II の 26 課から扱った。

<授業の流れ>

出席確認（+体温測定）

↓

宿題の答え合わせ

↓

導入・基本練習

↓

副教材

授業は、先生によって構成の順番は前後するが上記のような場合がほとんどだ。机の配置は縦何列かに分かれて横並びに配置されているか、人数によってはコの字型に並んでいた。

まず、宿題の解説の際に学習者が間違えた箇所を作文等で練習する機会を作っていた。加えて、50音表で動詞の活用形を確認する場面も見受けられた。

次に、導入・基本練習についてだ。導入に関しては、イラストカードや動画を使用して、動詞の具体的なイメージを膨らませるだけでなく、教室の電気や扉を使って動詞を説明していた。実際に先生が動作を示すときには、合わせて学習者にも動作を行ってもらっていた。また、シャツやカバンなど持ち物を教具として使用し説明していた。ジェスチャーで説明する際には、全身を使って大きくリアクションしていた。表情から心境を察せられるほどだった。

板書においても工夫がみられたため、実習で扱った他動詞と自動詞を例としてあげたい。他動詞と自動詞の違いを解説の際には、その違いが助詞と主語であることを示すが、先生によってはそれぞれを色分けして視覚的に判断しやすくしていた。板書の例は、以下に提示する。

人が	でんきを	消します	人が	でんきを	つけます
でんきが		消えます	でんきが		つきます
人が	ドアを	開けます	人が	ドアを	閉めます
ドアが		開きます	ドアが		閉まります

基本練習においても、導入と同様にイラストカードの使用がみられた。イラストカードの中には、先生のエピソードと結びついたものがあり、その後に学習者がエピソードを話すという流れが作られていた。それ以外にも子供だったときの話や失敗談など学習者自身の経験を話す機会が適宜設けられていた。また、新しい語彙が出た場合には、その意味を言葉やジェスチャーで説明するだけでなく、黒板のイラストやネットで調べた画像で提示していた。

そして、副教材としては聴解タスクやプリント学習、「今日の文」が挙げられる。リスニング練習の中でシャドウイングをする機会もあった。加えて、イントネーションも練習した。「今日の文」に関しては、授業で扱った作文等から1つ選んでキーワードと併せてプリントに記し、後日ホームクラスを担当している先生に対して発表するというものだった。

次にJ2についてだ。J2レベルのクラスは、J2 a, b, cの3つのクラスに分かれている。

クラスの人数は、10名前後ではあったがコロナ以前のクラスには約20名の学習者が在籍していた。クラスのレベルは、下から2番目の初級後半で「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」を一通り学習し終わった状態であった。それぞれのクラスの特色としては、J2aのクラスの学習者の国籍は中国圏を主として香港、台湾などの学習者が在籍している。J2bとJ2cのクラスの学習者は、国の偏りは特になくイタリア、スペイン、フランスなどのヨーロッパの学習者をはじめカナダ、スウェーデン、ニュージーランドなどの多国籍の学習者が在籍している。J2のホームクラスの授業は、毎日午後13:25～16:15の計1日3コマが基本である。各クラス1名担任の先生がいるが、授業を行う先生は基本的に曜日ごとに異なる先生がクラスを担当する。

<文法レベル>

- ・使役と受け身（～せる、～させる、～れる、～られる）

「誰がやるの?」という主語の部分を確認することで、使役と受け身の違いを理解している印象を受けた。

- ・「～そうです」「～ようです」

聞いて知ったこと、読んで知ったこと、それを誰かに伝える時に「そうです」を使い、自分自身の目や耳、鼻など様々な感覚を通じて「これは多分こうだな」と考えるプロセスが入るのが「ようです」と説明していて、普段日本人が感覚的に使い分けているものを言葉で説明することの難しさを改めて実感した。

- ・尊敬語 / 謙譲語

「お～なる」の形では当てはまらないイレギュラーな尊敬語、例えば「召し上がる」や「いらっしゃる」のような尊敬語のリストを配り、それを見ながらでいいのでペアになって実際に教員室の先生に4つほど尊敬語を使った質問を考え聞き出すというワークをやっていて、インプットだけでなくアウトプットにも繋がりより定着する印象を受けた。また、謙譲語の「参ります」「申します」なども表になっているプリントを見ながら練習問題を解くことで理解を深めていた。

<授業の流れと内容（試験前）>

出席確認

↓

宿題の答え合せ

↓

小テスト、リスニングテスト

↓

復習プリント

↓

復習プリントの苦手とする部分の確認

↓

<授業の流れと内容（通常時）>

出席確認

↓

宿題の答え合せ

↓

その日の文法の導入

↓

文法の内容説明

↓

ペアワークやグループワーク

を通じて何度も練習

終了

↓

終了

授業では「みんなの日本語Ⅱ」がメイン教材として使用されていたが、その他に文法に慣れるためにも確認問題プリントや穴埋めプリントなど、先生によって使用するプリントは異なっていた。また、初級後半だからこそある程度の文法はすでに習得しているため、ペアワークやグループワークといった各々が実際の場面を想定して練習する機会が多かったように思う。例えば、敬語や謙譲語の練習をする際には、アルバイトの面接官と受験者という設定のもと敬語や謙譲語で質問し返答するというような実際の生活の中で「使える日本語」を練習する機会が多かった。また、板書するというよりも先生がモニターにプリントやイラストを映し出しそれを学習者が見て考えるという場面が多かったため、日本人が授業の時に一言一句黒板の文字を真似して写す姿勢とは異なり、自分が理解できなかったところだけメモとして書くというスタイルが日本人の勉強法との違いのように感じた。また、先生が指名せずに学習者に問かける際も、答えがわかった人や考えや意見がある人がすぐに積極的に発言する姿からも日本の授業風景との違いを感じた。そして「私の国のかんこう」というテーマで1人5分ほど写真を見せながらのスピーチ発表では、それぞれの国の気候や治安、オススメの食べ物や場所などを紹介し、多国籍だからこそいろいろな国の話を聞くことができ大変新鮮でおもしろく、また学習者自身も自分の国のことだからこそみんなに伝えたい、教えたいという前向きな気持ちで取り組む印象を受けた。

【漢字クラス】

授業は、漢字圏と非漢字圏に分かれている。

まずは漢字圏の授業についてだ。中国・台湾・香港・マレーシアなどの国々を出身地とする学習者が参加している。前回の授業の復習→小テスト→テキストの内容という授業の流れだった。教科書の順番に沿って新しい漢字を学ぶ。参加した実習では、集・帰・進を扱った。動詞の使い方や読み、自動詞と他動詞を紹介し、その後にフラッシュカードを用いて新しい漢字を練習した。加えて、中国語等の漢字との違いを板書に記し、発音をしながら明確にしつつ間違いがないよう促していた。また、ホームクラスで扱っている文法を使って漢字の会話練習を行う機会が多かった。先生によると、語彙を増やすことを意識しているそうだ。例えば、「進」という漢字であったら進化・昇進・進歩など同じ漢字を用いる熟語の意味やその使い方を説明していた。また、英語で言葉のイメージを伝えている場面も見られた。

次に非漢字圏の授業についてだ。非漢字圏クラスに在籍する学習者の国籍は、イタリア、スペイン、カナダ、ニュージーランドなど様々。

<授業の流れ>

出席確認

↓

小テスト（漢字の書き取り問題、カタカナ書き取りリスニング問題）

↓

今日の漢字5つの導入（イラストを用いる）

↓

10回ほど書き取り練習（手本を見ながら筆ペンを用いる）

↓

他動詞・自動詞の説明、熟語の例文提示

↓

フラッシュカードで音読み訓読み確認

↓

チェックシート（3分間）

非漢字圏クラスの漢字授業では、まずは部首や漢字の構成、成り立ちなどの意味を理解するために、『イラスト』を非常に多く使用して教えるという印象を受けた。例えば、「集」という漢字を教える際には部首の「ふるとり」を鳥のイラストで表し、木という漢字は実際の木のイラストを使用し、「多くの鳥が木に寄ってくるイメージ、つまり集まってくるということからこの漢字が生まれたと言われている」というように、画面で絵を見せながら漢字の意味を説明していた。そうすることで、学習者も聴覚だけでなく視覚をも通じて学ぶことができ、より漢字が記憶されやすいように感じた。また、漢字を実際に書いて練習する際も漢字のバランスやとめ、はね、はらいの書き方に苦戦していて、全員が筆ペンを使って一生懸命手本と見比べながら書き、練習していた。そして、漢字クラスの小テストにはカタカナの書き取りリスニング問題も含まれていて、「コミュニケーション」や「メディア」というような小さい「や、ゆ、よ」の場所や、「のぼし棒」をどこに入れば良いのかわからず悪戦苦闘する学習者も多かった。

【目的別授業】

目的別授業とは、中級(J3)以上の学習者が、それぞれの目的に合わせて選択する授業である。目的別授業は、インターカルトの大きな特徴の1つであり、文法や読解力の強化を目的とした授業や小説を読む授業、戦争について考える授業など様々な種類の授業が用意されている。1週目に見学させていただいたのは、「からだで日本語」「生と死の日本語」「発音トレーニング」の3つの授業だ。

① からだで日本語

3～4人グループになり、グループ内で父、母、子どもの役割に分かれる。各グループで簡単な劇を創り、発表をした。実習生1人がいくつかのチームに入って、劇のシナリオを学習者と一緒に考えるのと、主に自然な日本語の文になるよう学習者に指導した。劇では、グループごとにかなりシナリオが違った。また、日本人（実習生）がいるグループは、不自然な日本語が劇中でほとんどなく、自然な日本語を教えることに対して、大きく貢献できるのだと感じた。

② 生と死の日本語

もし、自分が神様になって救える命があれば、誰を救うかについて学習者と話しあった。具体的には、コロナ患者の中から ECMO（体外式膜型人工肺）が使える人を神様になって選ぶことが出来たら誰に処置を施すかという話題だ。最初は、コロナ患者の年齢、性別、結婚歴だけで、次に職業と子どもの数がわかり、さらに患者の性格や家族構成など詳細がわかっていき、それぞれの情報の有無によって選択する人が変わっていくのが面白かった。国籍に関わらず、自分の友人や親族、幼い子どもといったある程度同じ価値観で救いたい人を選んでいることがわかった。

③ 発音トレーニング

日本語の自然な発音について学ぶことに特化した授業だった。見学した日の内容は主に、長音、小さい「つ」、ん、ら行についてだった。

実際に発音した文章については、以下のようなものがある。

- ① 新しい店がオープンした。
- ② あさっての切符を買ってきて。あさっての！
- ③ 満員の本屋。
- ④ れろ らろ れろ らろ らりるれろ らりるれろ りるれろら るれろらり
「庭には二羽ニワトリがいる」という早口言葉についても発音していた。

高低アクセントの練習では、

A : おれ、にほんご、あんまりじょうずじゃないんだよ。

B : そんなことないよ、じょうずじゃない。

という例文をもとに、イントネーションが細かく書かれ、イントネーションによる意味の違いについての解説もあった。

フィードバックの時間に、日本語の音声の高低差を勉強し、例文のイントネーションを一つ一つ調べてから教えているのかを聞いてみたところ、「大体感覚で分かっているので、細かく調べはしないが、曖昧だと思ところは調べている。学習者も教師が間違えていたら指摘できるようになってくる」と先生が仰っていたのが印象的だった。

二週目に見学した目的別授業について紹介する。ここでは印象的であった「JLPTN2 準備文法」と「食べ物豆知識」について取り上げる。

④ JLPTN2 準備文法

「JLPTN2 準備文法」は、日本語能力試験 N2 の受験準備のための文法の力をつける授業である。今回、私たち実習生は、能力試験の教科書で取り上げられている7つの文法項目（Nに加えて～、Vル Vイように(してください)、V(よ)うとしないように、[ふつう]ことがある、VルNのおそれがある、[ふつう]に決まっている、～にすぎない)を、クラス全体で発話しながら学ぶ授業の見学を行った。

文法の授業であると聞いていたため、授業内での会話の多さに驚いた。また、取り上げられる文法は教科書に載っている文法であったが、例文については実生活に沿った文を先生が出して発話を促していたため、理解がしやすく、試験勉強のためだけでなく日常生活の中でも使えるように文法を学ぶことができると感じた。また、このような所にも、実用を重視するインターカルト日本語学校らしさが垣間見えたように感じた。

⑤食べ物豆知識

「食べ物豆知識」では、日本の食べ物についての豆知識を学ぶ。私が見学した回は、日本のなべ料理についての授業であった。

先生は授業の内容に入る前に、学生数人に食べたことがあるなべ料理を聞いておき、そこで挙げられたなべ料理が授業スライドに出てきた際、学生自身に少し説明してもらって授業スタイルをとっていた。そのため、一方的な講義形式の授業でなく、学生と一緒に授業を作っている印象を受けた。また、他の国では冬寒いときに何を食べるのか、という問いを投げかけ、他の国の料理についても触れていたことが印象的だった。先生の質問の振り方や雰囲気による発言のしやすさもあったように感じたが、1階のラウンジで皆が思い思いの席から授業を受けられるという環境も、リラックスして授業が受けられ、発言がしやすい要因であるように感じた。

【教壇実習】

教壇実習では、出席をとることから始まり、最低 20 分から最高 30 分まで、授業を行った。一人一人が教案を自分で作った。例年であれば、新しい文法項目を学習者に教える形だが、コロナの影響で今年は主に学習者とある話題について話し合う授業を展開した。教壇実習までには以下の通りに準備を行った。

1 週目の金曜日 授業の展開方法、教案を作る意味、教案の作り方の説明



教案を実習生同士で話し合いながら作り始める



1 週目の土日 月曜日に教案を提出するため、最後まで書ききる



2 週目の月曜日 教案を担当の先生へ提出、先生からフィードバックしてもらう



2 週目の水曜日 教案を直したものを提出、フィードバックをもらって完成版に仕上げ始める



2 週目の金曜日 事前準備、リハーサル (2 限分)

(教壇実習当日)



教壇実習本番



実習振り返り、情報共有、担当の先生から全体フィードバック

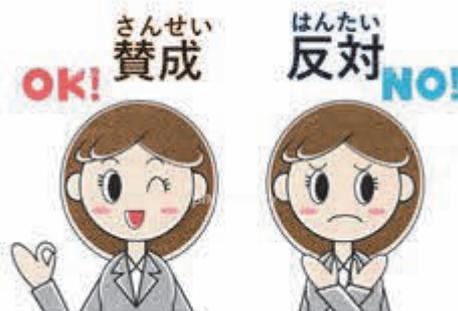
J1 クラスは、携帯電話をテーマに話し合う授業を行った。J1b クラスでは、まず、自分・相手のスマホのメーカーを聞くところから始めた。「～のスマホはどこですか。」と板書し、クラスメートで使っているスマホのメーカーを聞きあつた。次に、「スマホで何が出来ますか?」と聞き、「写真が撮れます。」と学習者が回答したら、「では、皆さんが、日本で初めて撮った写真は何ですか?」と話を広げた。日本で初めて撮った写真を教室のテレビに映して、その写真につ

いて学習者に一人一人発表してもらった。東京タワーという学習者が複数人いて、内容が被ってしまい、学習者も細かい説明を出来ないことが多く、盛り上がらなかった。次に、「日本では子どもが時々スマホを持っています。」と話題を変え、「10歳の子どもがスマホを持ちたいと言っています。子どもは、10歳です。皆さんは、10歳の子どもがスマホを持つことに賛成ですか?反対ですか?」とイラストを見せながら聞いた。賛成と反対についても、イラストを用意した。

あなたは、子どもがスマホを持つことに
賛成ですか?反対ですか?



10さい
しょうごく ゑんせい
小学5年生



「賛成、いいですね。私もそう思います。」うなづく動作をし、「反対。いいえ、私は、そう思いません。」首を横に振る動作をした。賛成、反対という言葉について学習者も理解してくれた。「子どもがスマホを持つことに賛成ですか?反対ですか?それはどうしてですか。理由も一緒に教えてください。」と伝えて板書には「～し、～し、反対/賛成です」と書いた。「～し、～し」の文法は既習項目であり、それを実践で使うことも授業の目的とした。学習者の多くは、10歳の子どもがスマホを持つことに反対だった。危険、勉強をしなくなる、など理由は様々だった。どちらでもないという回答もあった。最後に「子どもにスマホを持たせるのは何歳からがいいと思いますか。」と聞いた。18歳からという人もいれば、8歳からという人もおり、国籍関係なく、年齢では多少バラつきが見られ、それぞれの教育観が見られた。

実際に教壇に立ってみて、本番ではかなり緊張した。時間が足りるか心配していたが、思っていたよりも早く進んだ。教案は多めに作っていたので、予想より早めに進んでも25分ぐらいと制限時間が30分の中、いい時間に終わることができた。教壇実習では盛り上がりには欠けたが、教案の最後までいき、やりたい事ができたので良かった。積極的に発言してくれる学習者があり、授業を進めていく上でとても助けられた。学習者の発言に対してどういうリアクションを取ればいいのか分からないのと緊張もあり、「そうですか」や「いいですね」と決まった返答しか出来なかったのもっと柔軟な返答をできるようになりたと思った。学習者がたくさん発言出来る機会を提供することと平等にその機会を与えることができたのは良かった。また、学習者との関係性が大事で、日頃からコミュニケーションを取っておくことで学習者が発言や質問をしやすい教室の空気感の大切さが分かった。

J2クラスは、物価についての授業を行った。

J2a クラスでは、最初に「みなさんはコーヒーが好きですか？」という問いかけから、学生の国にあるスターバックスのコーヒー1杯分の値段の比較をウォーミングアップの話題として取り上げた。その後、生活費の話題に持っていき、生活費とその分類（家賃、食費、娯楽費等）の説明を、絵を用いながら行い、生活費をどのようにして得ているか、生活費の中で何に一番お金をかけているか、ということを知りたいと聞いたり、「日本は物価が高いので、節約をします」と話を転換させ、学生に節約をしているか、どのように節約をしているか、聞いたりした。

教壇実習については、①語彙コントロール、②クラスの学生全員に質問をして発話させること、③しっかり時間内におさめること、を目標において臨んだ。目標として掲げていたこれらの点に関しては達成できたと感じている。しかし、「教案通りに進めなくてはならない」という意識が強くなりすぎたことが原因で何度も教案を見ながらの授業になり、全体的にばたばたした授業になってしまったことは反省点として挙げられる。また、生活費の中で二番目に多く払っているお金はなにか、全体に向けて聞いた際に、「娯楽費」と答えた学生がおり、もっと深掘すればより面白い回答が得られた所に気づけなかったことにも悔しさを感じた。またこのような授業をする機会があれば、今回の経験を活かしてより良い授業を行いたいと感じた。

【スピーチコンテスト】

2020年9月15日(火)、「第39回 インターカルト日本語学校スピーチ大会」が開催された。J3以上のレベルの各クラスから選出された代表者13名が各々のテーマで5分間スピーチをした。この投票には、実習生も参加させていただいた。

例年ではホールを借りて行われるという話を伺ったが、今年度は新型コロナウイルスに関する対応として、以下のように行われた。

- ・代表者、会場担当の先生方、特別審査委員が校内特設会場でスピーチ大会を開催、その様子をZoomとYouTubeを通して配信。
 - ・各クラスの代表者以外の学習者は各クラスで待機・見学。
クラス代表者の発表前には、そのクラスメートがボードなどを持って応援メッセージを送る様子が配信画面に映し出される。
- ↓
- ・全スピーチ終了後、各教室のiPadの投票フォームから投票する。

- ・投票結果に応じて、最優秀賞、優秀賞、学生賞、クラス代表賞が送られる。
特別賞として吉野家賞、ネクステージ賞、凡人社賞が各特別審査員から送られる。

スピーチには決まったテーマが設けられておらず、各代表者が自由なテーマでスピーチをしていたのが特徴的であった。自国の女性と日本の女性のかわいさの比較や、自分の家族や知り合いとのエピソードのように、心温まる話や笑ってしまうような話もある一方で、自分の中の潜在的な差別意識、社会問題に対する意見等、聞いていて深く考えさせられるテーマもあった。私たちは普段日本人として日本で生活をしているが、外国人として日本で生活しているからこそ気付く発見や疑問点について話される方が多く、このスピーチ大会を見学して初めて気付かされることがあった。自分の経験や感じたことを母語でない言葉で表現することはとても難しいだろうと思ったが、この大会の評価方法には語彙や文法に関することよりもいかに相手に伝わるかということが重要視されていたように、大切なのは正しく伝えることよりも相手の心を動かすような気持ちの強さや態度なのだと改めて考えさせられた。

以下は、発表テーマと発表者の国籍である。

- 「マレーシアの言語」 マレーシア
- 「あなたが好きなのはどっち？」 台湾
- 「ステレオタイプと戦おう」 スペイン
- 「欲望はかくすな」 香港
- 「差別」 アメリカ
- 「遠くて近い国」 ロシア
- 「カフェのタカシさん」 中国
- 「世界を広げよう」 香港
- 「踏み越える」 台湾
- 「いい変化、こわい変化」 中国
- 「失敗・体験・人生・夢を叶えること」 フランス
- 「憧れのおじさん」 中国
- 「No Music, No Life」 タイ

【まとめ】

石原 これまで学んできた「日本語教育」の実際の現場に2週間実習させていただき、本当に学びの多い貴重な時間となった。中でも印象的だったのは加藤校長先生の「インターカルト日本語学校はプラットホームのような存在でありたい」というお言葉だ。様々な国から学習者が来て、そこで多くのことを学び、体験し次の目標へと旅立つ学習者を送り出すような場でありたいというお言葉から、日本語教育とは単に日本語という語学を教える場では

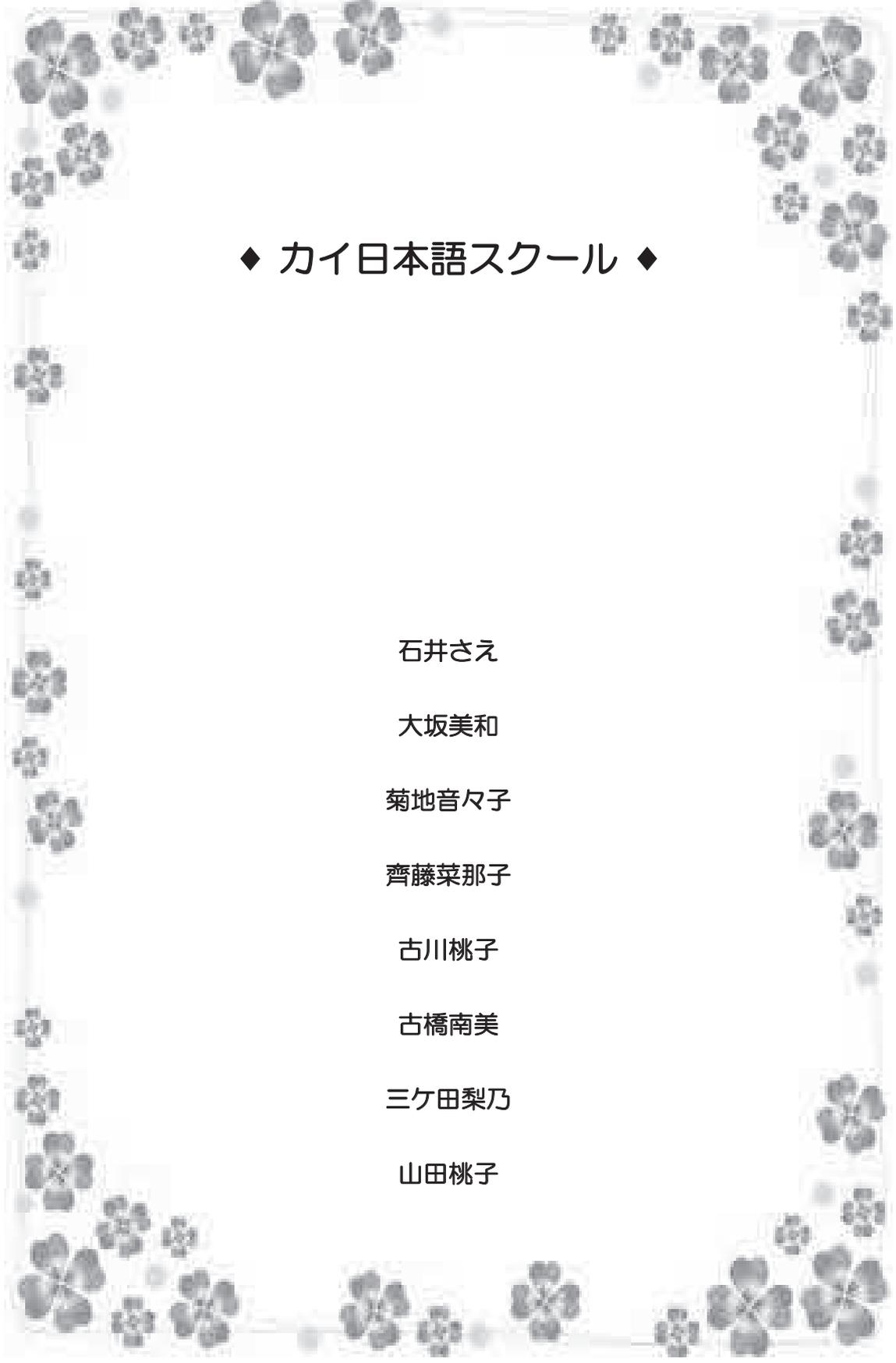
なく、それ以上に一人一人の人生に寄り添う場なのだと感じた。この大変な時に、対面での実習を受け入れてくださり、そして多くのことを優しく親身に教えてくださった実習先の学校と先生方には感謝の気持ちでいっぱい。社会に出た時、そしてその先の未来でもここでの学びを常に思い出したいと思う。

荻原 対面での実習という貴重な機会の中で、実際に目で見ただけからこそ分かることも多く、非常に学ぶことばかりの2週間だった。授業に参加する中で学びを得ることができただけでなく、レクチャーやフィードバックの時間の中でも同様にはじめて知ることばかりだった。インターカルト日本語学校や日本語教員の仕事そのものについても教えていただき、日本語学校が日本語を教えるだけの場所じゃないことを自身の経験を通じて考えるきっかけになった。また、実際に学校にいらっしゃる先生や学習者さんとお話しする中でも様々な発見があった。このような貴重な機会を頂けたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

荻山 2週間の対面実習の中で様々な授業を見学させていただき、先生の様子はもちろん、学生がどんなところに躓いているかというような細かなところまで、実際に知ることができたのはとても貴重な経験であった。また、実際に学生の前で教壇実習については、上手くいった所も上手くいかなかった所もあったが、経験して感じたこと全てが財産になったと感じている。このご時世の中で対面実習を経験させていただき、また様々な学びの機会を提供してくださったインターカルト日本語学校の方々、そして日本語教育実習の実施のために尽力してくださった石井先生、吉本先生に感謝している。

国場 授業に参加させていただき、先生方の話すスピードや間、立ち位置、学習者への発話の促し方など、対面だからこそ感じることができるとたくさん経験させていただくことができた。また、学習者が疑問を持つ点や、日本人だけの意見交換の場では出てこないような意見など学習者から学ぶ発見も多く、毎日新しい刺激を受けながら楽しく実習させていただき、座学と実践の違いを日々感じた。例年とは違う状況下で貴重な機会を頂けたことに感謝し、この経験を今後も忘れずにいたいと思った。

水原 教壇実習での授業が盛り上がらなかったことを残念に思っている私に、担当の先生が「授業で盛り上がりは重要じゃない。学生が、ちゃんと伝えたいことを言えるようになることが大事。」と仰っていたことが印象的だった。確かにどんなに盛り上がっても、授業が進まず、きちんとやるべき文法が学習者に身につけてなければ意味がないと思った。教壇実習のあるインターカルトだからこそ、教案を書く大変さ、授業を行う上で計画通りにはいかない焦りや学習者とのコミュニケーションの楽しさなどたくさんを経験できた。このご時世で対面かつ教壇実習を行う機会を与えてくれたインターカルトの方々に感謝の気持ちを持ち続け、今回の実習で得た学びを今後も活かしていきたい。



◆ カイ日本語スクール ◆

石井さえ

大坂美和

菊地音々子

齊藤菜那子

古川桃子

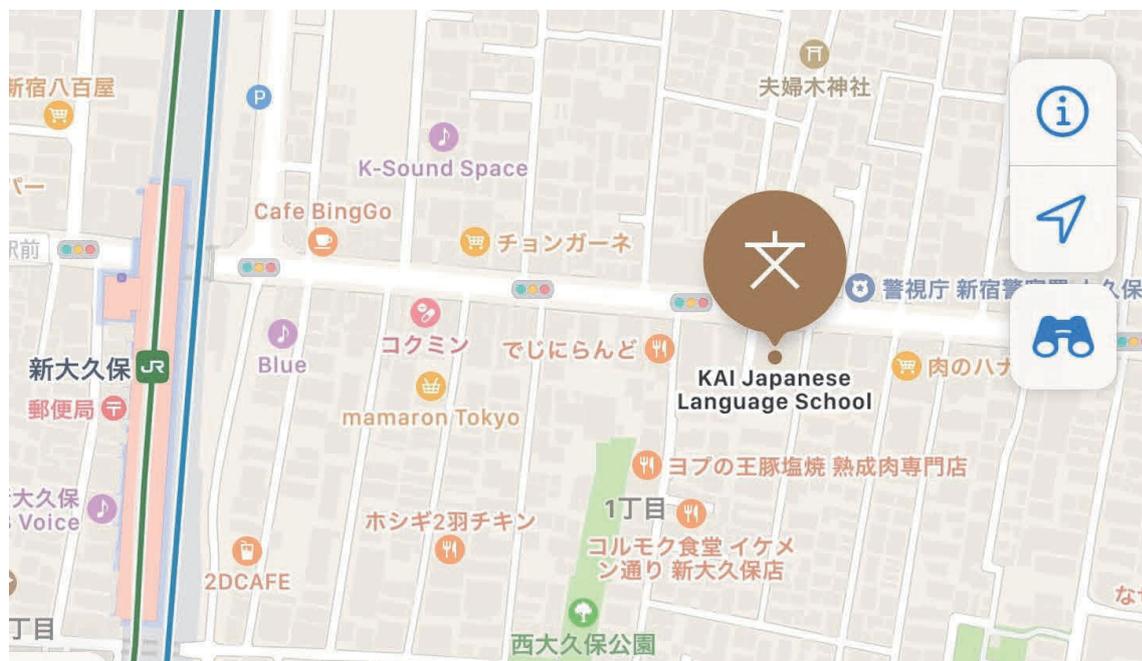
古橋南美

三ヶ田梨乃

山田桃子

1. **カイ日本語スクールの基本情報**（教育理念や代表者、場所）*全てカイ日本語スクールホームページより引用させていただきました。

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-15-18 みゆきビル 3F



TEL:03-3205-1356(9:00-18:00) FAX:03-3207-4651(24時間対応)

Email:admission@kaij.co.jp

代表者: 山本弘子

業務内容:在日外国人を対象とする日本語教育、日本語及び日本語教育の研究・出版など

従業員数:64名(2019年1月現在)

教育理念:イノベーションをキーワードに、学生の自己実現をサポートする

教育目標:日本語社会で機能する人材の育成

→目標の為の二つの柱

- 1、ブリッジ人材*であることの追求。
- 2、外国人としての価値を高めるための日本語教育の開発実践。

*日本と海外の橋渡しという意味。

KAI の意味とは

開、快、解、界、会、海、改、などの意味がある。そして「広く世界中の人々と出会い共に学環境で、日本語だけでなく相互理解のためのコミュニケーション方法も身につけてほしい」という学習者への思いと「より良いコミュニケーション教育のために常に開発・改良を行い、学習者に提供していく」という教師陣の姿勢を表している。

講師について：カイ日本語スクールの講師は下記のいずれかの条件を満たしている。

日本語教育能力検定試験合格者

日本語教師養成講座（420 時間）修了者

大学または大学院での日本語教育主専攻あるいは副専攻過程修了者

2. カイ日本語スクールのコースについて（実習生が実際参加したコースのみ紹介）

・ 実用会話コース

日本語でのコミュニケーション能力を高めることを目標にコースデザインされている。カイ日本語スクールオリジナルテキストを用いて、日常会話のスキルを高めていく。テキストは場面シラバスで構成されており、様々な生活場面での実用的な日本語を学ぶことが出来る。7月と8月は休講となり、代わりにサマーコースが開講される。学習者の人数は2～3名のことが多い。

〈授業内容〉

UNIT ごとに大きなテーマがあり、その中の LESSON で細かな場面に合った会話を学ぶ。日本語でのコミュニケーション能力を高めるため、テキストの文章は、書き言葉ではなく話し言葉で書かれている。また、学習者自身の立場に置き換えて、学んだ文章を使えるように会話を繰り返す。学習者の人数が少ないため、一人一人の会話量を確保することが出来る。

- ・サマーコース

実用会話コースに代わって、7月と8月にサマーコースの会話・文法コースが開講される。このコースは、主に日本語でのコミュニケーション能力を高めることを目標に、コースデザインされている。カイ日本語スクールオリジナルの実用会話コースと同じテキストを用い、短期間での効率的な学習効果を望む学習者が対象となっている。学習者の人数は2～3名のことが多い。

〈授業内容〉

実用会話コースと同内容。

- ・日本語総合コース

4つの言語技能である「話す」「聞く」「読む」「書く」の全てをバランスよく学ぶことが出来るようにコースデザインされている。長期的に学ぶ学習者に対してカリキュラムが組まれている。留学ビザの対象コースになっており、入学資格は高校卒業、または同等程度が求められる。学習者の人数は10名前後のことが多い。

〈授業内容〉

文法の時間ではオリジナルテキストを用い、その日に使用する新出語彙のチェックから行う。その後、新しい文法を学ぶ。前後の単語の品詞や例文などを確認して使い方と意味を覚えていく。zoomのブレイクアウトルームの機能を使い、学習者同士でオリジナルの会話を作り、実践練習を行う。漢字の時間では、オリジナルテキストである「チョコっと漢字」（通称：ちょこかん）を用いて、同じ読みの漢字や、同じ作りの漢字をまとめて学習していく。この際に書く作業も行う。読みの時間はオリジナルテキストである「前田ハウス」を使用する。ここで日常会話などを学ぶ。

・作文サポーター

学習者が600字程度の作文を書くことを目標とする作文の授業に、サポーターとして参加する活動。実習生が参加したクラスは4レベルの学習者のクラスだった。Apple社のpagesを使い作文の添削を行った。学習者の人数は12名前後のことが多い。

〈授業内容〉

全体で作文テーマを確認した後、zoomのブレイクアウトルームを利用し、実習生1人に対して学習者が3名程度になるよう分かれた。ブレイクアウトルームでテーマについてディスカッションした後、学習者が書く作文の文法的なミスなどを中心に添削を行う。文法的には正しいが、より自然な日本語らしくするためのアドバイスなども行った。最後に全体のメインルームに集まり、学習者が発表した作文に対して良いところの感想を言い合った。

・ビジネス日本語

日本で就労することを目標としている学習者に向けたコース。日本語そのものを学ぶのではなく、日本語を使って仕事をするために必要な能力を高めることを目標としている。そのため、他のコースに比べて学習者の平均年齢が高めである。学習者の人数は8名前後のことが多い。

〈授業内容〉

場面シラバスのカイ日本語スクールオリジナルテキストを使用する。「報・連・相」など日本で仕事をするに当たり大切なことを、どうして大切なのかという理由も踏まえて学ぶ。また、その際にどのようにすれば自分の考えを相手にスムーズに伝えることが出来るかなど、日本特有のクッション言葉の使い方も練習する。ペアになり、上司と部下の設定でロールプレイを行い、より実践的な会話を身に付ける。模擬面接を行うこともあり、その際は外部の企業の人事に面接官をお願いするため、就職に向けた準備をすることが出来る。

2-1. レベル分けについて

学習者のレベル、ニーズに合わせて上記の4つのコースが設置されている。学習者は「日本語コース診断」によって最適なコースを選ぶことが出来る。また、それぞれのコースによってレベル分けが異なる。

まずコースとコースの中のレベルを選ぶ前に、自分のレベルとニーズに合ったコースとレベルを選ぶために選ぶ基準が設置されている。一つは日本語学習期間と照らし合わせたレベル分けの基準がある。学習期間半年以内は初級、半年以上9ヶ月以内は中級、9ヶ月以上は上級とされている。さらにCEFRのレベルとも照らし合わせができるようになっている。A1は初級、A2は初級2～中級、B1は中級、B2は上級、C1は上級と学習期間の他にもコースを選ぶ基準が設けられている。

次にコースごとのレベル分けについて述べる。総合コースは8つのLEVELに分かれている。LEVEL1～2が初級、LEVEL3～5が中級、LEVEL6～8が上級である。初級から上級まで細かくレベル分けのクラスが設置されている。

実用会話コースは7つのレベルに分かれている。レベル分けの指標は会話力のみで判断されている。1～4は初級、5～7が中級であり、初級と中級のみのものであり、上級のクラスはない。

サマーコースのコース分けは会話・文法のレベル分けの場合、指標は会話力のみで判断され、7つのレベルに分かれている。S-1～S-4が初級、S-5～S-7が中級である。サマーコースの日本語能力試験コースの場合、2つのレベルに分かれている。JLPT-N2が中級～上級、JLPT-N1が上級である。サマーコースのティーンプログラムの場合、指標は会話力のみであり、2つのレベルに分かれている。T-1初級1、T-2が初級2である。サマーコースの中のどのコースを選ぶかによってもレベルが異なるため、よりニーズにあった学習をすることができる。

以上のように、カイ日本語スクールでは学習者のレベルに合ったクラスで学習ができるように細かくレベル分けがされている。また、日本語学習の目的に合わせてるように各コース内で新たな基準を設定しレベル分けが行われている。コースによってはあるレベルが級を横断していることも特徴の一つである。このような豊富なレベル分けは学習者同士がお互いに同じようなレベルの学習者と学ぶことで活動をする際コミュニケーションが取りやすい効果があると考えられる。

2-2. オンライン授業の充実

2011年の東日本大震災を機にオンライン授業環境整備とICT導入の研究を開始。2015年秋には日本語学校では初めて長期コースである総合コースの学生全員の一人一台iPad環境を実現。また、ICTを現場に本格的に取り入れるため、2015年にKAI DLS (Digital Learning System) というチームを立ち上げ、エンジニアと専任教師が、多くのデバイスに対応できるネットワーク環境の整備、システム構築、コンテンツ開発を開始。オリジナル教材のデジタル化、iPad教材の開発、映像教材作成、教師の研究、学生サポートなど、様々な作業を通してオンライン授業の充実化を実現。教材をMDM (Mobile Device Management) とLMS (Learning Management System) を通して配信する形に切り替えることでiPadを活用した授業を開始した。

2020年春新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンライン授業への変換を強いられた際も、短い期間でのシフトを成功させた。また、同チームが全クラスのZoom授業サポート、教師や学生のトレーニングを行いつつ、技術的な不具合や接続問題などにも即時対応し、円滑な授業運営を支援。デジタル教材や、zoomやpagesなどを活用し、完全なオンライン授業でも充実した授業を可能にした。

さらにオンライン授業を円滑に行い、学生が、iPadを最大限活用できるよう、WiFiネットワーク完備、DLSサポート、オンラインマニュアル、クラウドでの教材提供、オンライン図書館などのサービスを提供している。

今回の実習中の新型コロナウイルス感染拡大中の授業ではzoomの画面共有機能による授業、ブレイクアウトルーム機能による会話練習や活動、画面録画機能での欠席者へのサポート、さらにはpagesでの作文サポートなど、どの授業でも新体制にもかかわらず、充実した授業が行われていた。授業はパワーポイントを利用していたり、デジタル化された教材を利用したりして進められていた。あらかじめ先生方が教材研究、作成されていたことが感じられる教材ばかりであった。2011年からICT導入への動きが進められていたことや専門のサポートチームが立ち上げられていたことから円滑にシフトすることが可能になり、今回の突然の対応が求められた中でも充実した授業を行うことが可能であったと考えられる。

3. 学習者の特徴

3-1. 海外から授業を受ける学習者

カイ日本語スクールは、日本に来られない学習者に対応するために、オンラインで授業やアクティビティに参加するコースを設けている。海外にいる方も、日本在中の学習者と同じクラスで学ぶことができる。コロナによるオンライン授業で、日本にいる方も海外の方も同じように受講していた。

実習中に、実際に海外から参加している方と関わるがあった。オンラインで自宅にいなから学習したいという方もいたが、コロナの影響で日本に来られなくなったという方もいた。コロナで予定が変わってしまったけれど、海外から日本語学習を続けていつか日本に行きたいというお話が印象に残っている。

3-2. 学習者の多様性

一つのクラスにさまざまな学習者が在籍しており、年齢や出身地、日本語学習をする目的もそれぞれの学習者によって異なっていた。実習に参加したクラスで日本語を学んでいる理由を聞く機会があり、日本に留学している、日本で仕事をしたい、結婚して日本に住んでいる、日本文化に興味があるなど、一人ひとり違った目的を持っていると知ることができた。いろいろな背景を持った人達と同じクラスにすることで、単に言語を学習するだけではなく、多様性を尊重できる学習環境だと感じられた。授業中や休憩時間での学習者の方どうしの会話量が多く、クラスメイトのことが分かっていて仲の良い雰囲気があった。ディスカッションや発表なども他の学習者について知る機会になるのだと考えられる。

地域比についても、例年いろいろな場所から学習者が集まっている。総合コースを例に挙げると、在籍している学習者数の地域比は下表のようになる。33か国から学習者が集まり、さまざまな出身地の学習者が同じクラスで学んでいた。

総合コース (2020. 4. 1)

地域	人数	割合
ヨーロッパ	66	47.5%
アジア	37	26.6%
北米	18	12.9%
中南米	14	10.1%
オセアニア	4	2.9%
アフリカ	0	0%

(実習オリエンテーション資料より筆者作成)

総合コース：漢字圏（2020.4.1）

	19春	19夏	19秋	20冬	20春
漢字圏	29名	26名	34名	28名	16名
非漢字圏	163名	147名	161名	159名	123名
合計	192名	173名	195名	187名	139名

（実習オリエンテーション資料より筆者作成）

4. カイ日本語スクールの先生方の特徴

4-1. 授業スタイル

コロナの影響により、オンラインで授業を実施。オンライン授業だからこそ、学習者の方々は「どこでもいつでも日本語を学べる」という特徴を活かし、日本に住んでいる方々だけではなく、海外の方も参加されていた。

先生方の授業スタイルは、画面越しにホワイトボードを使用したり、楽器や歌、絵を使って説明したり、Zoomのチャット機能を使用したりなど、学習者に伝わる方法を模索し、授業を行っていた。

4-2. 語彙コントロール（優しい日本語や時々英語）

学習者の中でも初級の方には英語を使用。例.)” Plain form「～だ」→「です X」、「軟骨→ソフトなボーン」「ポライトとカジュアル」「ポジティブとネガティブ」

また教材によっては、レベルやコースごとに、語と語の間に隙間があったり、英語が含まれるなどの工夫がなされていた。加えて、先生が学習者に質問を投げかける際、オープンクエスチョンとクローズクエスチョンを組み合わせていた。それらが学習者の日本語学習への意欲や回答することへの意欲を促進させていた。先生が学習者の回答に対して新たな語彙を付け足して返答することも、語彙コントロールや語彙を増やすことに繋がっていたと考えられる。例.) よかった→とてもよかった

4-3. 学習者の理解度の確認

人数の少ないクラスでは、学習者1人1人の名前を呼んで「わかりますか」と問いかけていたり、また学習者が質問した際は、先に学習者に答えを言ってもらってから先生が答えることで相手の理解度を測っていた。

4-4. オンライン授業でも飽きさせない工夫

身の回りにあるもの、楽器、歌、絵などの表現方法を活かして日本語を教えていた。例えば、「着る」という動詞を学ぶ際は、先生が画面の向こうで白いTシャツを着る動作を行っていた。加えて白いシャツの中でも大きなTシャツと小さなTシャツを準備し、お店に試着しに行った際のロールプレイを行うことで、学習者が日常でも語彙を使えるよう実践的に活かせる方法を教示していた。また、「あれ」「これ」などの際は、部屋のををさして、説明をしていた。楽器や歌を使用することは、学習者が日本語を学ぶだけではなく、日本の文化をも学べる工夫に繋がっていた。

画面越しの対話だからこそ、身体全体でのリアクションと感情表現をしていたことも工夫の1つだと言える。笑顔で表情豊かにリアクションするだけではなく、Zoomのチャット機能やリアクション機能を活かし、オンラインという枠を越えて授業を盛り上げていた。

4-5. 学習者との距離感

学習者の方々の特徴や性格を先生方同士、共有されていた。またLINEというオンラインコミュニケーションツールを使って学習者をサポートし、こまめにコミュニケーションをとっていた。

5. コロナウイルス化での日本語学校のオンライン授業

5-1. オンライン授業

第2章で述べたように、カイ日本語スクールは、従来よりiPad（iPadは1人1人に貸し出している）を取り入れた授業を行っている。学習者はiPadで教科書を見たり、宿題を提出したり、授業中に漢字テストなどを受けていた。また、作文の授業においてはiPadのページズというアプリで共同編集をすることが出来るため実習で参加した際も、すぐに学習者の作文を添削することが出来た。また、授業中に先生方は学習者が読めなかった漢字の読み方や、学習者からの質問に答える際に、ホワイトボード機能を使用して、文法などを追加で説明していた。

5-2. 海外から授業を受ける学習者

コロナウイルスの影響を受け、日本に来日できなくなってしまった学習者や、自分の国に帰国しなければならなくなってしまった学習者もいた。しかし、カイ日本語スクールは早い段階でオンライン授業に切り替えていたため、海外に住んでいる学習者も受け入れていた。時差はあるものの、オンライン授業をメキシコやアメリカなどから受けている学習者もいた。

5-3. オンラインツアー

カイ日本語スクールでは、サマーコースを受講中の学習者を対象にオンラインでの東京観光や京都観光などのアクティビティを授業後に取り入れていた。今回はコロナウイルスの関係で残念ながら来日することが叶わなかった学習者も、オンラインではあるものの、東京や京都を観光などを楽しむことが出来たようである。もしも、日本に実際に来ることが可能であり、対面での授業が行われていた場合は、日本の文化を学べるような、お寿司を作ったり、生け花や茶道を体験できるアクティビティの企画がある。

5-4. フリートーク

学習者が日本語の日常会話を練習する場を設ける工夫がなされていた。東京女子大学の学生が実習生として参加した時は実用会話コースの授業内でフリートークの時間を設けていた。また、本来は、「かいわカフェ」というフリートークをする場が日本語学校に設けられているようである。学習者がコロナウイルスによる自粛やオンライン授業により日本人と会話する機会が減ってしまったため、今回の実習では東京獅子大学の学生がフリートークの企画を実施した。以下がそのまとめである。

5-5. 東女生の企画

今回は、東女生が2グループに分かれてフリートークの企画を実施した。実習生は、プランを考え、広告を作り、運営を行った。フリートークのテーマは「オンラインカフェ」と「夏祭り」で行った。どのようなテーマであれば会話が盛り上がるのか、どのように話せば伝わりやすいのか、どうすれば学習者の発話量が増えるのかということに重点をおいて企画を立てた。企画を通して、日本語教員の先生方が一つの授業を作るのに時間をかけているのか、時間管理や、想定される質問、授業の流れなど、細部まで考えて授業が行われていることが良く分かった。また、正しい日本語を使うことや、やさしい日本語を使うことがどれほど難しいのかということも実践を通して知ることが出来た。

6. まとめ

6-1. 学んだこと

・学生一人一人を支える授業の展開

ビジネスコースでは日本で就職を目指す学習者や、サマーコースには日本の漫画や映画、文化に興味を持って日本語を学ぶ学習者がいた。年齢も大人から12歳の子供まで幅広い年代の学習者がカイ日本語スクールで学んでいた。同じ学校の中でもコースやレベルによって雰囲気は全然違い、年齢や目的、背景が様々な学習者を支援し、ニーズに応えるコースが展開されていた。

・「教える・教えられる」が固定されていない

授業のなかで「～さんの国ではどうですか」と学習者に問いかけている場面を多く見て、一方的に文法を教えるのではなく、お互いに質問し合って「教える・教えられる」が固定されていないと感じた。一方的に授業を進めるのではなく、途中で「わかりますか？」と聞いたり、反対にインタビューの授業で学習者の言いたいことがわからないときには「わからないのもう少し説明してください」と伝えたりされていた。実習前は教師は聞かれたことや言われたことの全てを理解しなければいけないというイメージがあったが、知らないことがあって当然で、教師だから「すべてわからないといけない」という訳ではないと学んだ。

・オンライン授業の工夫

今回全ての実習をオンラインでさせていただいたが、ZOOMのチャット機能で新出語句の読み方をローマ字で見せたり、ホワイトボードを使用していたのが印象的だった。他にも、「食べます」「飲みます」を説明するときにハンバーガーの模型やマグカップを使用していた。学習者と部屋の中のお気に入りのものを持ち合って紹介し合いコミュニケーションを取ったり身の回りのものを活用して授業が進められていた。

6-2. 気づいたこと

・学習者から教えてもらうことがたくさんある

大学で日本語教育について学んでいるときは、日本語教師は学習者に日本語や日本の文化を教えるというイメージがあった。しかし、実習を通し他国の文化や慣習、また、海外の人から見た日本の良い所や観光地など教えてもらうことがたくさんあった。日本語教師は日本語を教えながらも、学習者たちから多くのことを教えてもらえる職業であり、そこが一つの魅力かもしれないと思った。

・日本語に関する知識の必要性

学習者からの質問に対して、日本語母語話者の自分でもわからないことや答えが見つからないことがあった。例えば、「『さみしい』と『さびしい』の違いはなんですか？」という質問である。普段感覚的に話したり、書いたりしている為微妙なニュアンスの違いについて答えることが出来なかった。気になる言葉があれば調べるなど日常生活のなかでも日本語に興味を持ち、自分の知識も増やして吸収していく必要があると考えた。

・自身の日本語と向き合う機会

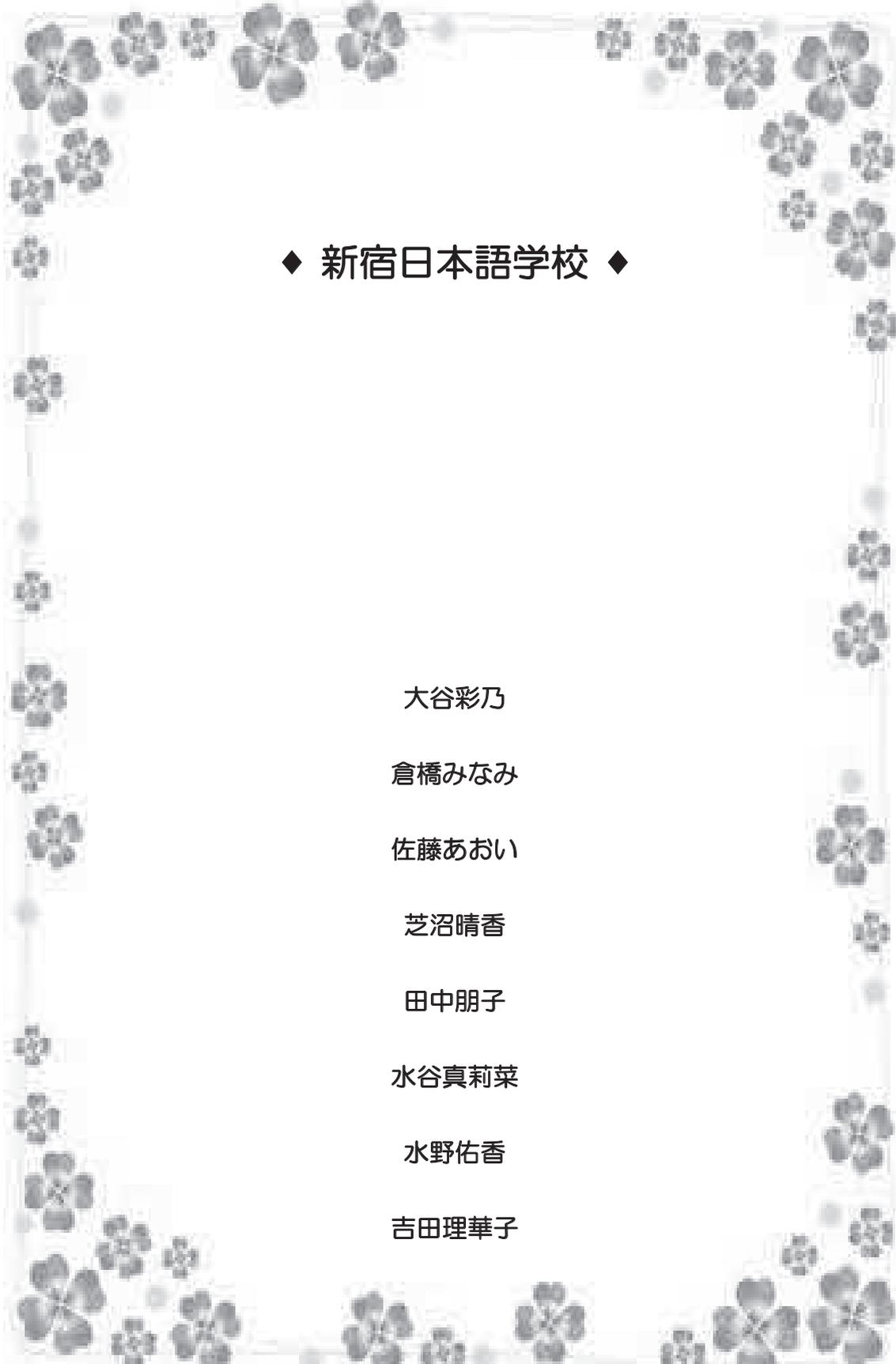
先ほども述べたように、普段感覚的に使っている為自分の日本語について考える機会はこれまででなかった。実習のフリートークの時に日本語を喋ることがとても下手だと感じたことから「日本語が上手いとはどういうことか」を実習のテーマの一つとした。サマーコースの授業で「～じゃないですか!」「～ですか!」は会話を続けたい、話したい気持ちを伝える効果があるという説明を聞いて、「話すのが上手い」ではなく「伝えるのが上手い」ということだと考えた。いままでは自分の喋りたいことだけ喋っていて相手に伝えようという気持ちがなかったことに気づき、どうしたら相手に伝わるかを意識することが大切であると気づいた。

6-3. 今後どのように実習の経験を活かしていくか

- ・アンテナを常に張り情報をキャッチすること
- ・バックグラウンドの違いを理解し尊重すること
- ・どうしたら相手に伝わるかを意識すること

東京オリンピックを控え、日本には今まで以上に外国人の方が増えていくと予測する。また、ダイバーシティやSDGsなどという言葉も最近をよく耳にし、多文化共生がより意識されるだろう。しかし、そもそも「多文化」とは文化の異なる人と共生することだけなのだろうか。「多文

化」とは、外国人と日本人といった国の違いだけでなく、子どもや高齢者、LGBTQ と呼ばれる性的マイノリティの方々、在日外国人、ろう者などの身体の不自由な方など、社会的マイノリティの方々も含まれると考える。つまり、文化とは国や地域や言葉とつながっているものだけではなく、そうした一人一人の持つ個性やアイデンティティ、バックグラウンドもある一種の文化であると捉える。自分と相手が「違う」人であることを認識し、その上で互いの文化を尊重し合い、共に生きるというのが、多文化共生ではないだろうか。これから社会に出て自分とは「違う」ことやものと多く出会っていくと予想される。その際、「知らない」で済ませることのないようアンテナを張り情報をキャッチし、受け入れられずとも理解し、尊重していくことが重要であると考え。コミュニケーションツールとしての言葉を使い、今回の実習の経験を活かして互いに尊重し合える環境づくりに貢献していきたい。



◆ 新宿日本語学校 ◆

大谷彩乃

倉橋みなみ

佐藤あおい

芝沼晴香

田中朋子

水谷真莉菜

水野佑香

吉田理華子

新宿日本語学校 実習報告

K17B1025	大谷彩乃	K17B1043	倉橋みなみ
K17C2301	水谷真莉菜	K17C3034	芝沼晴香
K17C3043	田中朋子	K17C3066	水野佑香
K17C3075	吉田理華子	K17C3031	佐藤あおい

【実習概要】

期間：2020年6月30日～2020年7月31日

内容：実習内容は授業見学、オンラインカフェ、事務作業の3つであった。1名実習生につき、1名の先生が担当としてついてくださり、活動の詳細な内容や日程調整についてはそれぞれに行った。授業見学も事務作業も、担当の先生によってクラスや活動内容が異なった。

【新宿日本語学校の概要】

1. 基本情報

設立：1975年

所在地：東京都新宿区高田馬場2-9-7（最寄り駅・高田馬場駅から徒歩7分）

講師：日本語教育能力検定試験合格者、日本語教師養成講座（420時間）修了者、大学または大学院での日本語教育主専攻あるいは副専攻課程修了者、これらいずれかの条件を満たし、社会人経験のある講師も多い。

学習者：学習者の出身は香港やベトナム、ヨーロッパ圏も多く、比較的ばらつきがある。クラスによるが10代後半～年齢層も幅広い印象だった。

2. コースについて

- ・短期コース　・対策クラス　・夜間クラス
- ・プライベートレッスン　・漢字クラス

・平日コース（今回の実習で担当・見学させていただいたコース）

45分間/コマ×4コマを週5日、午前クラス（9:10～12:40）または午後クラス（13:30～17:00）を選び、目標・レベルに合わせたクラスに登校するコース。

※実習期間中はコロナ禍で入国できない、体調不良等の理由で登校できない学習者のためのオンライン受講も認められていた。

実習では、実習生一人一人が講師の先生に担当についていただき、下記のようなクラスの見学や補佐、授業外の教務作業をさせていただいた。

一般コース—日本語での自然なコミュニケーションを目標としたコース

初級（初級基礎／初級1／初級2）

中級（中級基礎／中級1／中級2）

上級（上級1／上級2／上級3）

特進コース—日本の大学、大学院、専門学校への進学を目標としたコース

初級（初級1特進／初級2特進）

中級（中級1特進／中級2特進）

上級（上級1進学／上級2進学／上級3進学）

特別クラス—在籍コースに関わらず、受講に必要な指定レベルをクリアしていれば、

目的に合わせて受講することのできるクラス

ビジネス日本語／観光ビジネス日本語／日本語教師養成

オプションクラス

3. 教授法・教材について

日本語の文法構造を可視化することで、学習者がシンプルかつ効果的に日本語文法をとらえることのできる「江副式教授法」をベースとした授業が行われている。

「江副式教授法」に沿ったオリジナルの教材には、ひらがな・カタカナ・漢字・品詞などを検索して関連の動画を見ることのできるアプリケーション（「VLJ」など）や表現ごとに専用の機器で読み取るとその表現が読み上げられるコードのついた教科書などがある。こうした教材が学習者の授業内外で場所を選ばない効率的な学習を可能にしている。

4. その他

授業以外の充実したイベント・アクティビティも新宿日本語学校の大きな特徴の一つだが、コロナ禍で例年のようなイベントの開催は難しく、実習ではオンラインイベントの試みの一つとして、実習生主導のイベント「オンラインカフェ」を開催した。

【初級基礎・ビジネスクラス】

主な実習内容

初級基礎クラスの見学および授業補助、宿題の採点等

また最終日のみビジネスクラスの見学も一度行った

・行った業務作業の内容と感想

初級基礎クラスの宿題の採点を何度かさせてもらったが、授業では問題を解くのに時間がかかってしまっていた学習者が、宿題では積極的に回答しているのを見て、身近に彼らの成長を感じ

られる点に教師としてのやりがいのようなものを改めて実感することができた。

また宿題の書き取り問題の箇所からは、ひらがなの「とめ・はね・はらい」がまだ意識できていないことを発見できたり、「す」と「つ」を混同してしまっているなどのすぐに直さなければならない間違いや、学習者それぞれの苦手な箇所・分野を発見できるということから、宿題の必要性も強く実感することができた。

・初級基礎クラスのレベル目安

ひらがなは画数が多いもの(例「な」や「ふ」)、似通った形のを混同する(例「さ」と「ち」)といった現象が所々で見られた。読むことはできても、お手本のひらがな一覧表を見ながらでないと、自力で書くことが厳しい様子だった。また、カタカナも全体的にやや難しそうにしており、読めない文字も見受けられた。

逆に簡単な「大」のような漢字なら理解できていそうな時もあった。しかし、漢字を取り扱う際には、特に1つずつ成り立ちや書き順を丁寧に教えているように見受けられた。

また「大」が出てきた際に併せて、「大きい」の反対は「小さい」と説明するなど、反意語の同時学習も行うことが多いように見受けられた。

そこで「大きい」⇔「小さい」などと反復して繰り返し言わせることで、生徒に定着させるようにしているのが見受けられた。

・初級基礎クラスの授業内容の一例

初回の授業では、担任の先生の名前を正しいイントネーションで発音する練習を行っていた。手を使って音のアップダウンを表現したり、イントネーションが一緒の駅名があることを説明しながら発音練習していた。

また、自分も簡単に名前や住んでいる場所、大学名を自己紹介し、学習者たちが正確に聞き取りと書き取りできるか挑戦した。自分の名前は大半の生徒が聞き取れたが、世田谷という聞き慣れない単語が分かったのは半数以下、また「東京女子大学」といった大学名は東京は耳なじみがあり分かったものの、それ以下の「女子大学」の部分をほとんどの生徒が聞き取りできていなかった。

・ビジネスクラスのレベル目安

課題として新聞のコピーと語彙をまとめたプリントを配布し、新聞記事をまとめる練習をしていた。よって、新聞記事程度の日本語であれば、ある程度理解できるという生徒が多かった。ちなみに新聞記事をまとめる作業には、会社に入社してから資料をまとめる作業ができるようにという狙いがあるとのことで、かなり実践的な日本語まで使われているように見受けられた。

他にも、会社で電話を受ける時を想定していたロールプレイングも行っていた。自分が見学した日は、外出している人への引き継ぎを受ける電話の応対を練習していた。電話の途中で、相手の電話番号の聞き取りにも挑戦していた。「念のために携帯の番号を教えてくださいませんか？大至急ご連絡したいことがあるので、お電話を頂きたいのですが。」といったかなり長いフレーズの書

き取りもあり、全体を通してかなり高度な内容に挑戦しているように見受けられた。

・クラス全体を通して感じた重要なこと

「アウトプットの機会を適度に作ること」

⇒実際に発言させたり書かせたりすることで、生徒の理解度を明確にできるほか、生徒それぞれの苦手な箇所が細かく把握できるということがよくわかり、アウトプットの大切さを実感した。

「繰り返し発音練習させること」

⇒初級レベルだと聞きなれない単語も多いため、繰り返し発音させて音で覚える事ができるよう、促している様子がたびたび見受けられた。

【初級2特進クラスについて】

〈クラスの様子〉

クラスの人気は20名弱で、コロナによるオンライン対応の学習者はおらず、全員が登校、授業を受けていた。出身国自体はアジア圏に限らずヨーロッパ圏の学習者もあり、様々だったが、座席は使用可能言語ごとに固まって座っていることが主。講師の使用言語は日本語がメインのため、聞き取れなかったり、わからなかったりしたところをお互いに教え合う場面は多く見られた。そうした学習者同士のちょっとしたやりとりや休み時間中の会話も、授業見学1週目と4週目でも日本語の混じる量が格段に増えていた。このような学習者の日本語の使用機会はオンラインの活動では確実に設けることが困難であり、どう補うのかオンラインの活動での課題でもあると感じた。

日本での進学を目標とする学習者が主だったが、その経緯やアルバイトをしている・していない、寮暮らし・留学生同士同居などの現在の生活状況もまちまち。授業では、家族や生活についての話題になることも少なくないが、そうしたそれぞれに微妙に違った事情も考慮しながら授業を進めているというお話も伺った。

〈クラスのレベル〉

日本語能力試験 N5、CEFR A1 合格レベルを対象としたクラス。授業での使用頻度の高い表現（講師との直接のやりとりでは「それはまだ教えていただいてないです。」なども）や短く明瞭な会話であれば、理解、やりとりできていた。

〈授業の流れ〉

①漢字テスト

毎回授業の冒頭で漢字テスト（読み・書き10問）の時間が設けられている。テスト前に出題範囲の漢字の復習も時間があり、タブレットと連動したスクリーンに漢字を表示し、講師に続いて学習者が復唱する。

漢字テストの裏面を使用して、動詞やディクテーションのテストが行われる場合もあった。テスト中は講師が学習者の手元を見回り、拗音や促音などの表記や母語で漢字習得済みの学習者の漢字が日本語の漢字を表記できているか、などを確認する。拗音・促音をはじめ、表記方法に関するミスの指摘はオンラインの活動では難しく、対面だからこそできるきめ細かい指導の一つであると感じた。

②文法講義

動画教材などを使用しながら、表現の導入と練習の繰り返し。学習者は主にノートと文法ノートと呼ばれる自身で書き込みながら完成させていく文法書のような教材を埋めていく。どの表現でも「ウチ・ソト」をハッキリさせながら導入と練習をしており、実際オンラインカフェなどで学習者と話す際にもクラスのレベルに関わらず、「ウチ・ソト」がおかしい日本語の学習者はいなかった。

③漢字（次回小テスト分）

次回の授業でのテスト範囲の漢字の導入と練習。授業冒頭の漢字の復習と同様の教材を用い、講師に続き、学習者が復唱する。また、単に漢字とその読みだけでなく、意味の成り立ちを元に説明する。

【中級Ⅰクラスについて】

<クラスの様子>

クラスの人気は毎回13～14人で、登校してきている人が8人、オンラインで授業を受けている人が5～6人だった。国籍はフランス、スペイン、中国など様々だったが、ヨーロッパ圏の人が多く感じた。授業では発言が積極的に行われ、「こういう表現はおかしくないか」「この表現とこの表現の違いは何か」というように少しでも疑問に思ったことなどを積極的に先生に質問している姿を見ることができ、学習意欲の高さが伺えた。

<クラスのレベル>

- ・先生から質問されたことに対して「はい/いいえ」だけでなく、自分の意見も交えて述べることができる。
- ・読解の授業の音読練習の際には、短い文は全員で声を揃えて読むことができていたのに対し、少し長めの文となるとどこで区切れればいいのかわからなくなっている人が多い。
- ・教科書に載っている表現を少し変えて発表するという時に大幅に変える人や自分なりのアレンジを加える人が多い。
- ・自動詞と他動詞の違いについて説明できる。

<クラスでの活動>

授業では主に①～④が順番に行われ、⑤や⑥は日によっては行われないこともあった。

1. 漢字テスト、カタカナのディクテーション

授業では毎回最初に先生が配った漢字テストに取り組む時間（約15分間）が与えられた。読みや書きが両方いくつか含まれたものが10問出題され、その後、紙を裏返して5問のカタカナのディクテーションが行われた。15分間という時間は厳密に決められたものではなく、様子を見て全員が書き終わったと思われるところでテストは回収された。

2. 漢字の学習

漢字テストの後には、次のテストに向けた漢字の学習が行われた。スクリーンに映し出された漢字を先生が読み、その後学習者が復唱するというものである。扱われたのは主に漢字の読みについてであり、書き方や書き順などは授業では扱われなかった。

3. 音読テスト

事前に指定してあるテキストから抜粋された三文ほどの文章を学習者が一人一人前に出て音読した。発音やイントネーション、アクセントのチェックが行われた。

4. 長文の読解、語彙・表現の学習

テキストに記載されている様々なテーマが定められた長文（例：ホテルマンがゲストのラジオなど）が扱われた。学習方法としては、まず初めにCDを全文聞いてから一文ずつ全員で先生の後に続けて読み、学習者をランダムで指名して段落ずつ読んでもらった後、別の学習者に内容の確認となるような質問に答えてもらうという形だった。また、長文の中に登場した語彙や表現に関する学習も行われた。その際には、①様々な例文を扱って用法を覚えてもらう②文の中の空欄に当てはまるものを各自で考えて答えてもらう③自分で例文を作ってもらう、という3つのことが主に行われていた。日本の語学の授業の場合、①のようなインプットに重点が置かれている授業が多かったように感じるので、②と③のようにただ知識として取り入れるだけではなくその表現を自分が使えるかというところまで広げた授業は言語の習得に効果的なのではないかと感じた。

◎授業内で扱われた語彙・表現の例

「～ばかり」「たいてい」「(動詞の原型)のに使う/かかる/必要/便利」「～に効果がある/効く」
「～に應える」「～に應えて～する」

5. ペアで行う会話練習

会話の授業では病院での医者と患者の会話やレストランでの店員と客の会話を取り上げられた。

各場面でどのようなやりとりがされるのか見ていき、最終的には学習者同士でペアになって役割を分けて練習・発表した。病院が舞台の時には「体がだるい」という表現が登場したが、普段何気なく使っているもどのような状態か詳しく説明するのが難しいと思ったので、自分にとって簡単だと思われる言葉でもしっかり意味を知っておきたいと思った。また、授業では「ひねる」「しびれる」「湿布薬」といった、学習者にとっては馴染みのないような単語がイラストで説明されており、とてもわかりやすかった。

6. スピーチ発表

スピーチの発表は数回行われ、毎回2名ずつが「自分の国に持って帰りたい日本のもの」もしくは「面白いと思った日本語」について話した。教師として行うべきこととして、スピーチの最中にしっかり聞くことはもちろんのこと、大きく反応することやスピーチ後に発表者に質問することが、学習者が自信を持って発表できるような雰囲気につながるのだと感じた。

【中級Ⅱ特進クラスについて】

<クラスの様子>

クラスの人数は毎回19人で、登校してきている人が17人、オンラインで授業を受けている人が2人だった。国籍は、アジア圏の学習者を中心に編成されていた。授業では、難しい課題にも積極的に取り組み、あきらめないでやり遂げようとする姿勢が見られた。また、生徒同士で積極的に学びを深めることができる雰囲気がある。その一方で、人前に出て発表したり、学生同士でペアワークしたりするなど、自身の日本語力を第三者と共有する場面において苦手意識を持つ学生も少なからずいた。

<クラスのレベル>

- ・簡単な日常会話はスムーズにできる学生が多くいた。(例えば、関心のあること/趣味/将来の夢など…)
- ・漢字の音訓区別を困難とする学習者が多くいた。
- ・カタカナの学習で苦手意識を持つ学習者がいた。
- ・作文練習やスピーチなどによる少し長めの文章に対して、発音や言葉の区切り方で混乱する様子が見られた。

<クラスでの活動>

授業では主に①～④が順番に行われ、⑤や⑥は日によっては行われないこともあった。

① 漢字の復習・テスト

毎授業のはじめに課題に出されていた漢字のテストを実施する時間が設けられていた。まずは、クラス全体でテスト範囲の漢字を復習する。タブレットを連動させスクリーンに漢字を表示し、学習者は教師の後に続いて復唱を繰り返す。教師は学習者の様子を観察しながら、理解が曖昧な

漢字に関しては2～3回練習を行い定着させる。テストでは、読みや書きが両方含まれたものが10問出題された。時間はおよそ15分間で行われていた。15分間という時間は厳密に決められたものではなく、学習者の様子を見て全員が書き終わったと思われるタイミングでテストは回収された。

② 漢字の学習

漢字テスト後には、次のテストに向けた漢字の学習が行われた。スクリーンに映し出された。漢字を教師が読み、その後学習者が復唱するというものである。扱われたのは主に漢字の読みについてであり、書き方や書き順などは授業では扱われなかった。

③ 音読テスト

事前に指定してあるテキストから抜粋した3文ほどの文章を学習者が1人ずつ前に出て音読する。教師は、自然な発音やイントネーション、アクセントとなるよう学習者に指導を行う。

④ 長文の読解、語彙・表現の学習

テキストに記載されている様々なテーマが定められた長文（例：沖縄の自然保護、少子高齢化社会など）が扱われた。学習方法としては、まず初めにCDを全文聞いてから1文ずつ教師が音読し、その後続けて学習者が読む活動を行なった。読むことに慣れてきたところで教師は学習者をランダムで指名し、段落ずつ読む練習を行わせる。その後内容の確認となるような質問を投げかけ、回答させる形式をとっていた。また、長文の中に登場する語彙や表現に関する知識伝達も行われた。その際には、①様々な例文を使用しながらイメージを共有させる。②文の中の空欄に当てはまるものを学生自らで考えて応用させる。③学生同士でペアトークを行い、実践を通して使用できるようにする。という3つのことが主に行われていた。インプットの段階で日常をイメージさせながら行うことが重要で、用法を繰り返し使わせることを意識して行っていた。

◎授業内で扱われた語彙・表現の例

「文法：て形」「あっさり」「(動詞)～ことにする」「気になる/気にする」「邪魔になる/邪魔をする」「お世話になる/お世話をする」「どうしても」「～ことだ/ことです」「ますます」

⑤ 作文発表

教師が事前に定めたテーマに対する作文を作成する。今回扱ったテーマは「将来の夢」であった。教師は提出された作文を添削し、正しい日本語表現へと訂正する。添削済みの作文を学習者に返却した後、学習者はそれを暗記して自然な日本語で表現できるようにする。そして、授業において学習者3～4人を目安にクラスで発表する時間を設けていた。学習者の様子として、クラスの前で発表することに緊張や不安を感じている様子が見られた。また、発表者に質問を投げかける際において、積極的に発表者を支える姿勢が見られ非常に有意義な時間を持つ印象だった。

⑥ 1分間スピーチ

授業の初めに2～3人の学習者が1分間のスピーチを行う時間を設けていた。スピーチテーマは、「最近気になること」として近所にできたお店の紹介やSNSに載っている食事など、それぞれの学習者の関心に合わせた発表をしていた。自然な日本語表現を意識して行っていた。表現が難しいものに関しては、教師に指導を求める場面が多くあり、積極的に知識を手に入れる様子が見られた。

【実習での活動内容 中級基礎クラス】

中級基礎の授業内では、復唱練習を担当させていただく機会があった。

〈復唱練習の流れ〉

- ①教科書の本文を一文ずつ読み上げる。
- ②実習生が読んだ文を学習者が全員で復唱する。
- ③①②を交互に繰り返し、本文を最後まで読む。
- ④2, 3名の学習者を指名して、本文を最初から最後まで一人で読み上げてもらう。
- ⑤本文の下にある4択の3つの読解問題の答え合わせを行う。
3名の学習者を指名し、問題を読んでから、正解だと考える答えを一つ読んでもらう。
- ⑥問題の解答が正しいか確認する。

上記の流れで復唱練習を行った。

後日、先生が教科書の別のページではあるが、同じ流れで復唱練習を行っているのを見学させていただいた。先生の授業には多くの工夫が盛り込まれていることに気が付いた。

私は〈復唱練習〉の流れの①～⑥を順にこなすことばかりに捉われてしまっていたが、先生はその工程のなかでも、本文中に登場する語句や表現を取り出し確認を行っていたことが印象的だった。それも、単に意味を確認するだけのものではなかった。

その語句と同じ規則で成り立っている語を紹介していた。例えば、「市民」という語が現れたら、「区民」「県民」「国民」等の語を紹介し、他にも類似した語を知っているか学習者に尋ねていた。また、語句の意味の事柄について、学習者に対する質問をしていた。例えば、「ごみ捨て」という語が出てきたとき、学習者が家ではどのようにごみ出しを行っているか尋ねるといったものである。このようにすることで、自然と学習者の発話量は格段に増えていた。それに加え、単調に教科書を読むだけではなく、学習者は自分の中の経験や実生活に結び付く話をするため、皆生き活きと授業に参加しているように見られた。また、経験したことがないような事柄については、「今後自分も体験してみたいかどうか」等、出来るだけ学習者に引き寄せた質問にすることで、授業への関心を高める工夫がなされていた。

また、言い間違いの指摘についても大きく違いが見られた。私は、言い間違いや話してくれたことが不明瞭で分からなかった時は、曖昧に頷いてしまっていた。学習者に間違いを指摘すると、日本語での発話に対する自信を削いでしまうと考えたからだ。しかしながら、先生は言い間違いを聞くと直ぐに訂正を行っていた。また、話している内容が不明瞭な場合も積極的にどういう意味か聞き返していた。授業後に話を伺うと、伝わっていなかったり違和感のある表現であったりした時には聞き返しや訂正があった方が勉強になって嬉しいという声が聞かれた。

【クラスでのアクティビティー】

〈七夕〉

7月7日の前の授業で、学習者に短冊を配り、願い事を書いて校内に飾った笹につるしてもらった。クラスの中には、七夕という行事について知っていた学習者はほとんどいなかった。そこで、七夕という行事があることを簡単に紹介し、短冊の書き方についての説明を行った。

七夕の文化についての説明は当日に任せて頂けることを知ったため、手間取ってしまった。相手の経験したことがない文化を言葉で説明することはとても難しく感じられた。日本語教員は学習者の母国の文化や宗教についてよく知る必要があるが、それと同時に、日本の文化についても日頃から関心を持ち説明が出来るようにあらねばならないと感じた。特に自分の国のこととなると当たり前のもので素通りしてしまうことが多いが、普段の生活にも疑問を抱くことが大切であると分かった。

短冊の書き方については、縦書きであることや願い事と名前を書く場所の説明をした。しかし、書き方についての説明はそれだけではなく、願い事は「～ますように」と結ぶ表現をすることの説明もした。各々に短冊を書いてもらった後、数名にどのような願い事を書いたのかについて発表をしてもらった。

〈ふるさと紹介〉

教科書のふるさとについて紹介をする例文を授業で読み終えてから、学習者自身のふるさとについて紹介をする授業があった。一人一人の所要時間は約2分程度で、宿題で作文してきた原稿を読みながらの発表であった。学習者は各々、教科書の例文に登場した単語や表現等を使いながら、自身のふるさとの魅力を紹介していた。

◎画像の活用

事前に学習者には、発表で使うふるさとの建物や食べ物の画像を、スマートフォンで数枚用意することを課題としていた。当日は、スマートフォンを装置に繋ぎ、画像を大きなスクリーンに映し出しながら発表が行われた。写真があることで、ふるさとのイメージがより具体的になり、皆一人一人の発表に強く興味を示して発表に耳を傾けている様子であった。また、学習中の日本語だけでは伝えることが難しいような内容でも、写真を1枚示してから言葉を添えるだけで分かりやすく表現することが可能になっていた。発表の後には、発表者に対して自由に質問をする時間がとってあった。発表を聞いてから自分で考えて質問をするというのは少し難しいところがある。内容や発表中に登場した言葉を記憶してなければならぬことがあるからだ。しかし、写真のおかげで視覚的情報が頭に残るため、比較的質問がしやすくなっていたように感じられた。

[オンラインカフェ]

オンラインカフェは、新宿日本語学校で以前から実施されている活動である。毎週月水金曜日の午前・午後にそれぞれ1時間ずつ、ZOOMを利用して学習者の方々と会話や簡単なゲームを行う。新宿日本語学校は午前クラスと午後クラスに分かれているため、学校において午前の授業を履修している学習者は午後のオンラインカフェ、午後の授業を履修している学習者は午前のオンラインカフェに参加することが可能である。つまり、同じ学習者が同日の午前・午後の両方のオンラインカフェに参加することはない。

我々は実習期間である2020年7月中の1ヶ月間のオンラインカフェを担当した。実習生のみで、毎回の話題を考えたり、人数によってはブレイクアウトルームを作成したりなど、臨機応変な対応も交えて工夫しながらの運営となった。オンラインカフェに関連した活動としては、我々がオンラインカフェを担当する旨を示したチラシを作成し、宣伝をしたり、毎回のオンラインカフェ後に新宿日本語学校の先生方へレポートを提出したりした。

オンラインカフェで扱った内容としては、自己紹介、出身地、しりとりなどのゲーム、日本のアニメ・漫画、アーティスト、日本の駅、連休の過ごし方、テーマパークなど多岐に亘った。特に日本のアニメや漫画については、実習生よりも学習者の方々が詳しいこともあり、刺激を受けた。また、学習者の方々から実習生への質問では、「日本人は友達に会ったときに『元気ですか?』と聞きますか」というような少し考えさせられる質問も受けた。その他にもオンラインカフェで困難であった点は、レベルの異なる学習者がいた場合の言葉の選び方や、途中参加の学習者の対応、通信トラブルの際の対応などであった。

成果としては、宣伝の甲斐もあり学習者の方々が最大15人程参加して下さることもあった。最終日には学習者の方々から「日本について沢山のことを教えてくださいありがとうございます」という言葉もいただいた。実習生側の感想としては、「学習者の方々がどのようなことに関心をもっているのかを知ることができた」や「学習者の方々が日本について詳しくて刺激になった」という意見が多かった。以上の通り、オンラインカフェは学習者と実習生双方にとって有益なものとなった。また、コロナ下で教育の在り方が変化し始めた時期であったということもあり、オンラインという新しい形での日本語教育を体験したことは我々実習生にとって自信にも繋がる大変貴重な経験となった。

【事務作業について】

事務作業には、授業の準備作業と授業後の添削作業、そしてテストの準備作業の大きく4つの作業があった。

①授業の準備作業

授業前の準備作業は、クラスのレベルによっては多少異なるところもあると思うが、概ね授業での文法説明で用いる例文の作成や、アクティビティーのデモンストレーションの作成などがある。

まず例文作成について、その課で学習する内容を網羅するだけでなく、例文中にまだ習っていない範囲の単語や文法、言い回しなどがないように注意を払いながら作成を行った。また、教科書的な例文だけでなく、普段の会話の中で使うような文章や、社会情勢(季節やコロナウイルスなど)に合わせたタイムリーな例文を作成することで、日本で暮らす学習者に対しより実感しやすく、わかりやすい例文の作成を行った。

次に授業で行うアクティビティーのデモンストレーションの作成についてだが、具体的には授業内で学習者が行うプレゼンテーションの見本作成等を行った。プレゼンテーションの内容は日本に来られず、オンラインで参加している学習者に対し、習った文法を用いて東京の観光案内をするというものであった。こちらも学習する内容を網羅すること、そしてまだ習っていない範囲の単語や文法などがないように注意を払いながら作成した。しかしプレゼンテーションということ踏まえ、例えば最後に、「ぜひ行ってみてください」等の締め言葉を入れるなど、プレゼンテーションとしての定型文の一例を提示するためにプレゼンテーション特有の言い回しなどは用いながら作成した。

②授業後の添削作業

授業後の添削作業では、主に宿題やテストの採点を行った。

出される宿題は、漢字の練習やその課の復習問題のプリントが主だった。漢字の練習の課題では、書いている漢字や読み仮名にミスがないかチェックした。また「字がきれい」だとか「沢山練習していますね」といった課題達成には直接関係ないことに関しても目を配り、コメントするように心がけるなど、学習者のモチベーション維持に配慮しながら行った。

テストの採点の際は、まず自ら回答の作成を行ったうえで解答を確認し、採点を行った。テストが良くできた学習者には「よくできましたね」といったコメントを、あまりできなかった学習者に対しては、字の丁寧さやできた部分についてと「次は〇〇を頑張りましょう」という2つの面からコメントをして学習者の意欲醸成に配慮して採点を行った。

③テストの準備作業

テストの準備作業では、学期末のテストの作成を行った。実習を行わせていただいた7月は対面形式とオンライン形式併用で授業を行っていたが、8月から完全オンライン形式に変更になることだったため、8月に行う学期末のテストをオンライン用に作成した。具体的には、グーグルフォームを用い、日本語能力試験の問題を入力して作成した。

④オンライン授業のスライドの修正

オンライン授業用のスライドの修正では、主にスライド全体を見やすくする作業を行った。先生が一つ見やすいスライドの例を見せてくださり、それに習って修正をした。品詞ごとに文字の

色や大きさを変えたり、図を入れることで文字だけが詰まった読みづらいものにならないようにする注意をした。オンライン授業ならではの、分かりやすくするための工夫や技術が様々にあることに気が付くことが出来た。また、実際に授業で使うスライドにふれることで、新しい表現を説明するときの順番を学ぶことが出来た。



◆ ラボ日本語教育研修所 ◆

前期チーム

赤崎文音

五嶋友香

島貫このみ

鍾嘉蔚

寺沢瑞希

前川奈々美

吉田有里

赤崎文音(K17B1002) 五嶋友香(K17A3070) 島貫このみ(K17C3036) 鍾嘉蔚(K17C2062)
寺沢瑞希(K17B1080) 吉田有里(K17A3164) 前川奈々美(K16B1109)

1、実習概要

[期間] 2020年7月6日～2020年7月31日 1週間に2日×4週間

[アクセス] 公益財団法人ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-26-11 成子坂ハイツ 2F

[時間割] 午前クラス:9時30分～12時55分 / 午後クラス:13時30分～16時55分

[参加クラス]

初級午前、初級後期、中級午前、中級前期、中級中期、中級後期、上級 計7クラス

[実習内容]

1週間に2回、同じクラスのオンライン授業と対面授業に参加した。基本的に1週間の1日目は授業見学、2日目は授業参加で、週ごとに異なるクラスに参加した。授業見学・授業参加後に、「授業記録」(ラボ日本語教育研修所に提出するもの)と「実践記録シート」(学校に提出するもの)をそれぞれ作成した。

オンライン授業は、各々の自宅から参加した。実習終了後、振り返りミーティングを行い、メンバーがそれぞれ学んだことや感想を共有した。黒崎先生からも実習を通しての講評をいただいた。

【学校紹介】

○授業システムについて

前述の通り、ラボの授業は午前クラス(9時30分～12時55分)と午後クラス(13時30分～16時55分)がある。1限は1時間45分で、各クラス4限ずつの構成になっている。時間割、及び実習期間の午前・午後のクラスは、以下の通りである。

今季は新型コロナウイルスの影響で対面授業とオンライン授業のハイブリッド型であった。対面授業とオンライン授業の特徴については、全体感想で述べる。

午前クラス		午後クラス	
1 限目	9時30分～10時15分	1 限目	13時30分～14時15分
2 限目	10時20分～11時05分	2 限目	14時20分～15時05分
3 限目	11時20分～12時05分	3 限目	15時20分～16時05分
4 限目	12時10分～12時55分	4 限目	16時10分～16時55分

午前クラス:初級午前、中級午前、中級中期、中級後期、上級

午後クラス:初級後期、中級午前

○ラボ日本語教育研修所の特色

・テキストについて

ラボでは、『みんなの日本語』のような一般的なテキストを使用せず、オリジナルのテキストと副教材を開発し、使用している。教科書に合わせてカリキュラムを作成するのではなく、カリキュラムに合わせて教材を開発することにより、ラボ独自の授業が展開されていた。オリジナルのテキストがどのような役割を果たし、どのような効果があるかなどについては、全体感想で述べる。

・少人数でグローバルなクラスについて

今季はコロナウイルスの影響により、1クラス約10名前後であったが、ラボでは通時でも1クラス最大15名と決められている。他の日本語学校では、1クラス最大20名と決められていることが多いため、ラボは少人数クラスであると言える。少人数クラスでは、教師の目が行き届きやすいという特徴がある。ラボの先生方は、少人数クラスの特徴を活かし、学習者一人一人のニーズに合った指導、一人一人に寄り添うような指導を行っていた。

また、学習者の出身国は、ベトナムや韓国、モンゴル、中国、タジキスタン、アゼルバイジャン、シリアなど、様々であった。シリア出身の学習者の中には、難民留学生の方もいた。「多様な文化背景を持つ学習者は、お互いの価値観や考え方を分かち合うこともできる一方で、意見の食い違いなどからちょっとした言い合いになってしまうことがある」「自分が意図していなくても相手を傷つけるような話し方をしてしまうことがある」と先生方から伺い、これは、グローバルなクラスの大きな特徴であると感じた。

2、実習中の発見

実習期間中は、メンバー全員が毎週異なるレベル(初級、中級、上級)のクラスに参加し、主に授業見学を行った。参加したクラス別に分けてまとめる。

【初級午前】

●参加した授業について

- ・学習者:新聞奨学生(モンゴルの学生2名、ベトナムの学生2名)
- ・日時:7月6日(月)9時15分~12時35分
(新聞奨学生の授業は通常の午前クラスよりも開始時刻と時刻が早い)
- ・テキスト:『初級前期ユニット1』(オリジナルのテキスト)
- ・主な内容:(対面授業)

① 模倣練習→コーラス→ソロ→インタビュー

T:これはなんですか。

S:_____です。

T:_____ですね。

② 模倣練習→コーラス→ソロ→インタビュー

T:これは にほんごで **なんと** いいですか。

S: _____です。

T: _____ですね。

③ 模倣練習→コーラス→ソロ→インタビュー

T:すみません。いま、よろしいですか。これは **なんと** よみますか。

S: _____です。

T: _____ですね。

④ 時間の読み方の練習(〇〇時〇〇分のフラッシュカード。コーラス→ソロ)→授業は〇〇時からです(模倣練習→コーラス→ソロ)→授業は〇〇時までです(模倣練習→コーラス→ソロ)→ワークシート(時間の読み方をひらがなで書く)

T:いま(時間)です。(時間)からです。(時間)までです。

⑤ カレンダーで月と日にちの読み方の確認→月と日にちのフラッシュカード(コーラス→ソロ)→文字カードを使用した代入練習

_____は  からです。 _____は  からです。 _____は  までです。 _____は  までです。

_____ かいてん 開店、OPEN/へいてん 閉店、Close、Closed、よる 夜に

⑥ 絵カードと文字カード、板書を用いた代入練習(コーラス→ソロ)

なんじからですか。 **なんじまでですか。** **いつですか。** = **なんにちですか。**

なんにちからですか。 = いつからですか。

なんにちまでですか。 = いつまでですか。

※**外枠**はホワイトボードに貼った文字カード。

【気づいたこと】

〈①に関して〉

- ・学習者がわからないような絵カードをあえて使用し、①の導入をスムーズに行っていた。
- ・コーラス練習の時は、学習者が質問者で先生が回答者の時と、その逆もあった。
- ・「くつべら」などの複合語の時は、「くつ・・・なんですか?」という質問の仕方も取り入れていて、「へら」が「べら」になるということを強調していた。

〈②に関して〉

- ・ベトナム語/モンゴル語(学習者の母語)ではなんですか?と聞き、学習者の母語と意味を一致させることにより、新出単語の定着を図っていた。

〈③に関して〉

- ・質問に対する答えとして「もういちど、おねがいします。」「ありがとうございました。」も補足で説明していた。

〈①～③に関して〉

- ・先生が学習者一人一人に絵カードを配布していた。はじめは教室で、学習者が一人ずつ先生に質問をして、先生がそれに回答するという練習をしていた。その後、また新しい絵カードと

付箋を渡された学習者は教室を出て、受付にいる先生方に絵カードの内容を質問するというインタビュー形式の練習をしていた。一度教室内で練習するという過程を経たうえで、教室の外(今回は校内であったが)での練習をすることで、少しずつ段階的に「現場」を意識していたように感じた。

〈④に関して〉

- ・4、7、9だけ異なる読み方であるのを視覚的にも分かるようにするために、板書をして説明していた。
- ・「ふん」が「ぶん」となる場合は「ぶん」と赤い文字で板書をしていて、また、「10ぶん=じゅっぶん、20ぶん=にじゅっぶん、30ぶん=さんじゅっぶん」というように、学習者にとって難しい拗音の読み方も板書をしていて。

〈⑤に関して〉

- ・生教材としてカレンダーを使用していた。「こんげつ、きょう、あした、あさって、きのう、せんしゅう、こんしゅう」などの言葉を付箋に書き、それをカレンダーに貼っていた。視覚的にも分かりやすい工夫であると思った。
- ・月と日にちの練習の時、日にちは1日～10日と、特殊な読み方である14日、17日、20日、24日のみ使用していた。
- ・文字カードの代入練習の時、街中で見かける様々な表記(開店時間PM4:00～、あさ9時OPEN、8月11日(日)～、12月24日より、など)を使用し、よりリアル感を出していた。

〈⑥に関して〉

- ・「いつ」が「なにち」と同じ意味であるということを説明していて、既習項目の復習になっていると思った。

●初級午前クラス全体で気づいたこと

- 今日の文型は会話の時に使用することが多い為、「話すこと」を意識した活動が多かった。
- 絵カードの内容は、どれも学習者に馴染みのあるものや身近にあるものが多く、教室の「外」で日本語を使用することを意識した工夫であると思った。
- 導入の時もオリジナルの絵カード(テキストに登場してる先生と学生)が使用されていて、統一感があり、分かりやすいと思った。また、導入の流れがスムーズであり、非常に勉強になった。
- 授業が始まる前のオリエンテーションで話した内容が、今日勉強した内容と重なっていることがあり、授業内で上手く拾っていた。このような臨機応変な対応も日本語教師には大切であると感じた。
- 基本的にすべてひらがな(板書、絵カード、文字カードなど)で説明していた。
- 学習者のスケジュール表を使用するなど、なるべく学習者自身に関係のある質問をしていた。これも、教室の「外」で日本語を使用することを意識している工夫であると思った。
- 学習者は、出身国に関わらず、カタカナを読むことよりも書くことのほうが苦戦しているようであった。

○発言が多い学習者、少ない学習者に対する接し方が異なっていた。(発言が少ない学習者に対しては大袈裟に褒めるなどして、学習のモチベーションを上げたり、自信を持たせたりしていた。) (五嶋)

【初級後期】

●参加した授業について

- ・学習者:シリア人の学生1名
- ・授業時間:13時30分~16時55分
- ・主な内容:会話、文法

〈会話〉(対面授業): 教科書のダイアログに沿って文法の導入と会話の練習

授業の流れ:①教科書のダイアログを読む ②文法をフラッシュカードで確認
③ダイアログを読んで会話の練習

【気づいたこと】

○学習者に寄り添った授業ペース

学習者が一人だったこともあり、丁寧に学習者の質問に答えていた。授業で出てきた語彙や文法でなくても、関連したものまで説明していた。そうすると、学習者が思い出したようにそれらを使って文を作っていて、かなり学習者の発話量が多くなっていた。

○繰り返して練習する

フラッシュカードの量がかかなり多く驚いた。今回は、iPadで絵や写真を見せて、学習者に答えさせる形を取っていた。面白い問題も沢山あり、教室が終始和やかで、学習者が発話しやすい雰囲気だった。学習者が一度間違えた問題は、全ての練習問題が終わった後に、もう一回出したり、最後の会話の練習の際にも確認したりと、念入りに練習がされていた。

〈文法〉(オンライン授業) 動画で学習内容を導入、パワーポイントを使い練習

授業の流れ:①webにアップされている動画を見て、プリントを完成させ、確認テストを受ける(個人作業) ②確認テストのチェック、文章の音読 ③辞書系の動詞をを可能系に変換する練習 ④文章を可能系に変換する練習

【気づいたこと】

○根気強く間違いを正す

初級後期の学習者は、文法に苦戦している様子で、何回もいい間違いををしてしまっていたが、先生は一回一回丁寧に指摘し、直すようにしていた。伝えたいことが伝わればよいのではなく、正しい使い方をして伝えられるように、きちんと間違いを正すということも重要なのだと感じた。

○初級の学習者のモチベーションは保ちやすい

文法に苦労している様子だったが、初級の学習者のほうが学んだことをすぐに日常生活で使えるため、モチベーションは保たれやすいと先生が言っていた。新しいことが多く、学んだこ

とをすぐに使えるため、初級の方が楽しんでいる人のほうが多い印象だという。今回のクラスの学習者も、文法には苦戦していたが、覚えたことをすぐ口に出して楽しんでいる様子だったので納得できた。

●初級後期クラス全体で気づいたこと

○丁寧に授業を進める

学習者が1人だったということもあるが、学習者の質問には納得がいくまで答え、学習者の間違いには根気強く訂正するという姿勢が見られた。教師と学習者の距離が比較的近く、お互いが授業のテンポを作り出しているような印象を受けた。教師は学習者の苦手な部分をきちんと把握しており、弱点に寄り添った授業が作られていた。

○発話しやすい雰囲気づくり

休憩時間も含め、終始教室がなごやかで、学習者が発話しやすい環境になっていた。学習者も間違いを恐れず、発話を沢山していた。練習問題の際にも、自分で習った文法を応用して自分の家族のことなど教えてくれた。日本語を話したい、と思えるような環境を作ることが大切だと感じた。(寺沢)

【中級午前】

●参加した授業について

- ・学習者:新聞奨学生 4人
- ・授業日時:9時15分~12時35分
- ・主な内容:初級文法の全体確認・復習(オンライン授業)
- ・授業の流れ:①初級文法の読解問題を解く・答え合わせ
②文法を使ってイラストを説明する

【気付いたこと】

○学習者の心理面に配慮

中級レベルのクラスだが、学習者はまだ中級レベルの日本語能力に達していない人が多いため、学習者の能力に合わせて初級レベルの復習をしていた。学習者は当てられても答えがすぐに出てこない場面が多くあったが、教師は沈黙になることで学習者を不安にさせないよう早めにヒントを出したり、切り替えて授業をすぐに進めるという工夫をしていた。

○学習者にとってイメージしやすいイラストや例文を使う

写真・イラストや記号、4コマ漫画などを使って、学習者が状況や意味をイメージしやすいように工夫されていた。他にも、LINEのメッセージのやりとりや、フェイスブックの投稿を想定したものがあつた。また、大学関連・JLPTの申し込み・アルバイト関連・忘れ物・体調不良・電車遅延・遅刻連絡など、学習者にとって身近で起こり得る状況を設定したものを多く取り入れている。

○学習者が復習しやすい工夫

教師が作ったパワポやハンドアウトに、「～とき(43)」「Vながら(44)」のように、出てきた文法全てに文法テキストの番号が示してあり、忘れたところを各自で文法テキストを見て復習できるようにしてあった。

●中級午前クラス全体で気づいたこと

○学習者

学習者は朝日新聞の奨学生として来日しており、早朝から働いた後日本語学校に来ている。授業後も仕事があるため、教師は授業の終了時間が延びないように配慮していた。

○学習者の意欲を高める努力

学習者の中にはレベルに追いつけずモチベーションを失っている人が何人かいたので、そのような学習者にはできるレベルよりも下のレベルから始めて、できることをたくさん積み上げることで自信をもたせるという狙いでアプローチを行っていた。クラスの中でも一人一人のレベルにばらつきがあるので、教師はそれぞれの学習者の能力を見抜き、それに応じたアプローチをする必要があると学んだ。(吉田)

【中級前期】

●参加した授業について

・授業の日時:9時30分～13時30分

・参加した授業の主な内容:文法学習、読解、作文、小テスト・実力テスト見学

〈文法〉(対面授業)7月9日(木)

授業の流れ:授業の最初に前回の内容と宿題の確認を行う。その後ホームページ上にアップされた先生が作成した文法説明動画を個人で視聴し、プリントの穴埋め・確認問題を受ける。時間になったら全員で確認問題を使って、理解度をチェックする。

【気づいたこと】

○わからない語彙を日本語の文章で説明するのがまだ難しい人が多い印象を受けた。しかし日本語の語彙を日本語で説明するという練習は、学習者の日本語語彙力を増やすことに効果的であると感じた。

○微妙なニュアンスの違いを明確に区別して教えることが大切である。例えば「アドバイス、注意、指示」の違いは確認問題で誤回答している学生が多く、教師は意味が同じでも用法が異なる言葉をきちんと説明できる能力が必要である。

〈読解〉(オンライン授業)7月13日(月)

授業の流れ:まず新聞を読むために練習問題を行う。(ニュースを聞いて聞こえた単語に丸を付ける、聞こえた文章の穴埋めをする、記事を読んで時間に関する言葉に丸をする)

練習問題の語彙を全員で確認した後、ホームページの動画を個人で視聴し、語彙の読み方・品詞をノートに記入する。ノートに書いたことばの漢字を組み合わせで語彙を作る。練習問題を個人で解く。

【気づいたこと】

○「陽気、気温、気象」の違いにつまずいている学習者が多くいる印象を受けた。明確に違いを説明すること、またその際簡単な日本語に噛み砕いて説明することが大切である。

○ニュースを読解する練習では、数字などで分かる「いつ」に関する情報を読み取る練習から行う。難しい情報でも少しずつ分かるところから理解していき、学習者のモチベーションを下げないことが大切である。

○学習者の一人が、子供がよく言っているから、と「消防車」を一番よく覚えていたのが印象的であった。実生活で触れている言葉は呑み込みが早い。逆に、今日学習した言葉を実際のニュースなどで耳にしたら記憶に深く残るのではと考えた。

〈作文〉(オンライン授業)7月4日(火)

授業の流れ:メールの書き方について説明を受けた後、実際に先生に個人でメールを送る。

実際に学校にメールをするときに使える例を学んだ。

【気づいたこと】

授業を休む時のメールや、教室に忘れ物をした時のメールはすぐに日常生活で使えると思った。作文は決まった正解はないため、学習者の語彙力が試されると強く感じた。

●中級前期クラス全体で気づいたこと

全体的に発言の多いにぎやかなクラスである。つい長くおしゃべりをし、授業が遅れてしまうこともあるようで、先生がしっかり区切りをつけてまとめていた。(島貫)

【中級中期】

●参加した授業について

・学習者:4名

・授業の日時:7月10日(金) 9時30分~13時30分

・主な内容:読解、発音

〈読解〉(オンライン授業):文章を読むときのポイントを学ぶ

・授業の流れ:①読解の際のポイントを押さえる ②4行程の文章を読んで「話題」と「主題」を考える ③本文(信号機に関する、『どうして「緑」なのに「青信号」というのか?』という文章)に関する写真を見て文章の内容を推測 ④本文を読み、表を穴埋めして内容を整理する ⑤各自、文章に関する読解問題を解く ⑥全員で答えあわせ、確認

〈発音〉(オンライン授業):文章に「スラッシュ」を入れて区切って読む練習

・スラッシュとスラッシュの間を止まらずに読めるかどうかポイント

*他にも「拍」、「アクセント」を重視していて、毎回3つの中から選んでいる。

・授業の流れ:

- ① 教師が読む文章(〈読解〉で使用した文章)を聞いて、学習者はスラッシュを入れる
- ② スラッシュを入れた位置が合っているかの確認
- ③ 教師の後に続いて学習者が読む(スラッシュごと→文で区切る→全体通して)。
- ④ 学習者は皆マイクをオフにして各自読む練習をする。
- ⑤ 挙手制で文章を読み、教師がそれを録音する。*希望すれば読み上げのやり直し可能

【気づいたこと】

○教材の使い方

信号機に関する文章を読む前にまずは、関連する写真を見せていて、内容が頭に入って来やすいように工夫されていた。また、信号機に関する文章が、「読む」だけでなく、「聞く」や「話す」といった力を伸ばすためにも使用されていた。教材は使い方次第で、一つの力だけでなく、いくつもの能力を伸ばすために使えるということを学んだ。

○指名された学習者ではなく、別の学習者が答えたときの教師の対応

指名されていない学習者が答える場面が多々見られた。その際に教師は、指名された学習者が答えるまで待っていた。ただ、指名された学習者が何も答えない時に、別の学習者が答えを言い、それをそのまま指名された学習者が答えとして言っていた場合も、「別の学習者の答えを聞き取ることができる」という、指名された学習者の一つの能力であると捉えているといるようだ。こういった対応は、双方のモチベーションの維持に繋がると気づいた。

○オンライン授業における、教師の姿勢

使用するプリントの種類や箇所を理解するのに苦労している学習者が何人かいて、それに対して、教師は何度も丁寧に説明していた。オンライン授業の際の、学習者の状況が読み取りづらいという課題に対して教師は様々に工夫されていることを知り、より柔軟で丁寧な対応が必要だと実感した。

また、音読の授業の最後で1人ずつ文章を学習者が読み終わった後に、良かったところと課題点を一人一人に伝えていた。学習者の進み具合にも教師はそれぞれ対応をしていた。画面上のやりとりとなるオンラインだからこそ、学習者に寄り添う姿勢はより大事だと感じた。

●中級中期クラス全体で気づいたこと

他のレベルと比べて、同じクラスの中でも学習者のレベルに差があるように感じ、それに対して授業では、すでに習ったことを復習することを重視している印象を受けた。また、初級とは違って、休憩時間に学習者同士が日本語を使って話したり教え合っている姿も見られた。(前川)

【中級後期】

・中級後期について

中級後期は「中上級」若しくは「上級準備クラス」という意味合いがあり、今までに練習したことを積極的に運用し、間違いは自分自身で修正できるようになることを重要視している。主な授業はディベート、メモ・ノート、記述の技術、読解、読解技術、文法、新聞の慣用句である。ディベートの授業では分析能力と話す能力の強化、メモ・ノートの授業ではまとめる能力と書く能力の強化、記述の技術の授業では留学試験の記述問題の対策、読解の授業では様々な文章を自ら読み、熟語を正しく音読・表記できるようになることを目的としている。また読解技術の授業では効率的な読解ができるようになること、文法の授業ではN2,1の文法整理と文作練習を学び、新聞の慣用句の授業では新聞でよく使われる慣用句を学習する。

●参加した授業について

・授業の日時:7月8日(水) 9時30分~12時40分

・主な内容:

〈ディベート〉(対面授業)

まずはディベートの目的や利点、進め方を確認した。その後立論の練習として、自己紹介をした。その際、各自10分程度の時間を使い自己紹介を考え、時計を見ずに発表し、誰が一番1分間に近い時間で発表をまとめることができるかを競った。

また立論の練習の二つ目として、VTRを2本視聴し、賛成と反対のどちらの意見につくかとその理由を発表した。

【気づいたこと】

○まずは学習者が実際に取り組むこと

ディベートの概要を学んだら、すぐに自己紹介のタスクに取り組んだ。この練習は時間を意識することが目的だったが、実際にスピーチをすると1分に満たない学習者が多く、提示された時間でスピーチをするにはどれほどの分量が必要なのか、身をもって学ぶことができた。教師は最後にまとめとして見本を提示していた。

○発言しやすい雰囲気づくりの重要性

宝くじ当選に関する内容と、上司のかつらに関する内容の2本のVTRを視聴した。視聴後にどちらの立場につくかを教師が学習者に問いかけた際、多くの学習者が自ら積極的に自分の立場とその理由を発表した。その中で特に印象的だったのは、教師の問いに学習者が答えるだけでなく、ある学習者の発言に他の学習者が意見を言い、それに対しさらに他の学習者も発言を重ねるというように、学習者同士の対話が多く見られた点だ。それは、クラスの雰囲気が非常に明るく、発言をすれば否定されるのではなく他の学習者が拾ってくれ、さらに意見をくれるという、発言しやすい教室がつけられているからだということが分かった。(赤崎)

●中級中期クラス全体で気づいたこと

学習者からの質問や発言、学習者同士のやりとりが非常に多く、賑やかなクラスだった。学習者が自主的に、そして主体的に学ぶことを意識している。

【上級】

ラボ日本語教育研修所のホームページに載っている通り、上級になると学習者が今まで習得した知識を活かせることと、表現力を高めることを目指し、様々な授業方法と活動を取り入れている。そのため、授業テーマも多様化している。例えば社説、雑誌やドラマなどを使って、読み書きの力を高める授業活動をしている。会話では、テーマを選んで発表するや、ゲームを授業活動として取り入れたため、かなり特徴的であった。

●参加した授業について

・主な内容:

〈表現力〉(授業)

授業の流れ: ドラマを視聴し、その後は 200 字程度でワンシーンの情景説明を書く。

【気づいたこと】

○見せられたものを理解するだけでなく、それを整理する、そしてわかりやすく、正しく伝えるには高度な総合的能力が必要だと感じた。

○学習者の背景と出身はそれぞれのため、高コンテキスト文化である日本語表現を理解するに苦戦している学習者もいた、故に教師は学習者の文化背景に気を配り、一人一人に合わせた基準で評価するよう、全ての学習者を同一基準で評価しないようにしていた。

○学習者が使った表現、「魂が抜けたようにうつむいている」、「気を落としたまま背中を向け」などに驚いた。

○登場人物の心情の変化が大きかったため、それを細かく説明する難しさを感じた。

〈説明する力〉

授業の流れ: 四つのテーマから一つを選んで、写真を展示しながら 5 分間を発表する。

【気づいたこと】

○オンライン発表と授業ならではの難しさ、さらにアイコンタクトや身体表現のコントロールの難しさを分かった。

○スピーチを通じて学習者それぞれの特徴が見えるし、学習者の出身国についての勉強は必要と感じた。

○「日本語」教育は、文法的な面だけでなく、学習者自身の個性を意識することが大事だと気付かされた。

○わかりやすく 5 分間話し続けるのは難しかった。

○発表から学習者それぞれの国柄と特徴が分かって来て、同じ国であっても地域によって異なることがあるため、学習者の出身国や文化的背景について一定な勉強をすべきだと思った。

〈会話・コミュニケーション活動〉

授業の流れ: 聞き手の五カ条を説明し、それを意識しながら会話するよう活動をした。

【気づいたこと】

- 漢字や単語の説明には、よく知られている単語や漢字の一部だという説明をするとわかりやすいということに気付いた。
- 会話する時、題材選びというのも大変重要なのだと分かった。
- 文化の違いによってコミュニケーションの違いも当然あるから、その違いに気づくことも大切と分かった。
- コミュニケーション活動から多様性を理解し、お互いを尊重するようの国際的視野を身に付けられる。
- 相槌は日本特有の文化かもしれないが、お互い理解するには便利だと改めて思った。

●上級クラス全体で気づいたこと

- 多くの実習参加者は上級レベル授業の難しさに対し驚いた。また、日本語教育、さらに「日本語の授業」はただ日本語の文法・語彙を教えるだけではなく、もっと大切なのはお互い理解し、尊重し合う考え方や能力を養うことだと思っている。そして、学習者の個性とスペースにも気を配り、学習成果を画一的な基準で評価しないよう、深く体感できた。最後は、授業進行や教室の雰囲気について、対面授業とオンライン授業それぞれの難しさについて考える機会も得て、大変勉強になった実習であった。(鍾)

3、実習全体を通して気づいたこと

【オンライン授業のメリット・デメリット】

ラボはオンラインと対面のハイブリット方式をとっていた。ラボでのオンライン授業の一番大きな特徴は、授業中ずっと zoom に入りっぱなしなのではなく何度も出入りする点である。例えば文法の授業では、授業開始時にプリントの予習の部分を皆で答え合わせをしたら、zoom を退出して各自で文法の動画をホームページで視聴し、プリントの穴埋めをして、時間になったらまた zoom に入室して、答え合わせする、という流れであった。

・メリット

何度も出入りをする事で集中力を保つことができるという点が挙げられる。授業中ずっと画面共有されたパワーポイントをみながら説明を聞いていると、学習者は受け身になってしまう可能性がある。しかし zoom を退出して各自で練習問題をとくことで自分だけで考える時間が確保され、内省する時間を設けることができる。そして学習者同士で話すことができないからこそ、自分で何をすべきか考えて行動する力も身につく。さらに、教師は学習者の部屋の中を画面越しに見ることができ、どのようなところで誰と生活しているのかなど、学習者の別の面を垣間見することもできる。

・デメリット

時間になったら自分で再び zoom に入室する必要があるため、しっかり時間管理をしなければ授業の再開が遅れてしまうという面が挙げられる。また通信の状況が悪ければ授業に大きな支障をきたすため、ネット環境が整っていなければ受講に苦労してしまう。

このようにオンライン授業を見学する中でメリット・デメリット両方の側面をみることができた。その中で一番大きな学びは、covid-19 の影響でオンラインを取り入れることにはなったが、「オンラインのせい」にはせず「オンラインだからこそ」できることをするという姿勢で授業を作り上げるということである。

【驚いたこと】

① ラボオリジナルのテキスト

『みんなの日本語』などのテキストは使わず、オリジナルのテキストや教材が使われていた。そのため、教材にネットの記事や心理テストを取り入れるなど、独自のプログラムが作られており、学習者の興味を引くような題材になっていた。

② 漢字テストなどの合格基準が高い

70 パーセント以上という高い基準を突破するため、多くの学習者が休み時間などに先生に質問し、自主的に学んでいる姿を目にした。

③ 多様性に富んだ環境

学習者の年齢層が予想以上に広がった。高校を卒業してから入学した学習者もいれば、母国で働いてから来日した学習者もいた。また、クラスによっては学習者の出身国も様々だった。

④ 多くのクラスで発言がとても多い

私たちが受けた英語や外国語の授業では、発言が少なかったため驚いた。とても活発的で、早く日本語を身につけたいという想いが授業態度からも伝わってきた。

【ラボの教師の特徴・大切にしていること】

① チームで教える

同じレベルでも曜日によって担当の教師が変わるため、他の曜日の授業を担当している教師同士の共有を大切にしていた。学習者の学力や学習観、性格、効果的な接し方など、授業中に発見したことや、授業のアイデアなどを共有し、同じレベルを担当している教師で一丸となり、目標に向かって取り組んでいた。

② 学習者の自律性を大切にする

学習者が自分で目標を設定して学習が進められるよう、学習者一人一人のレベルにあった漢字のプリントなどを用意していた。その上で、目標を達成した学習者にはもう少しレベルの高い課題を課すこともしていた。授業外でも、学習者が漢字のテストをやりたいと申し出た際は時間をとり、自ら進んで学習する環境を作っていた。

③ 学習者の将来を考えている

学習者がテストや試験に受かるために日本語を教える、と言うことはもちろんだが、それ以上に、学習者が日本社会で生活できるように、卒業後を見据えた授業を考え、学習者と関わってい

た。試験に受かるだけでは、社会に溶け込むことは困難で、実際に生活に結びつくような学習をすることが大切だと考えている。

【現場で見た教師の工夫】

① 教材について

ラボでは教材を教師が毎年クラスに合わせて作っている。オリジナルのプリントやパワーポイントには「この授業の目的」「ポイント」「チェック」などと所々に書かれており、シンプルでわかりやすいものになっている。例文は日常的に使う話題や、ラボの教師の名前を登場させるなど、馴染みやすい文章が多かった。教材によってはオリジナルキャラクターを作成し、親しみやすさが感じられるものもあった。このような使いやすい教材により、学習者は自主的に学習することができていた。

② 学習者への対応

ひとりひとりとしっかり向き合う姿勢が特徴的であった。例えばそれぞれの個人に「〇〇さんは～～ができていて、～～が課題」と伝え、学習者が自分の学習を客観視できるようにしていた。

授業は個人課題を取り組む機会が多かったが、一人一人の課題をしっかりと確認してから活動に入っていた。特にオンライン授業では学習者の名前をこまめに呼びかけながら、全員が授業にしっかりと参加できるようにしていた。

中級から上級の学習者には、はじめから誤用箇所を指摘するのではなく、ヒントを与えてどこが違うのか自分で気づくことの大切さを教えていた。

【日本語教師の仕事において大切なこと】

① 好奇心

日本語教師は、学習者にとっての数少ない日本人の話し相手でもある。学習者が、日本語で知っていることを「話したい」と思えるような教師であるために、日々様々な情報にアンテナをはっておき、様々な話題に興味があるという姿勢であることを心がけることが大切だと学んだ。

② 異文化理解力

日本語学校は、一人一人違うニーズ、学習スタイル、出身国の違いによる様々な考え方など多様な学習者が集まり学習する場である。そのような学習者の多様性を否定せずに認めて、日本の文化を押し付けず寄り添う心を持つことが大切だと学んだ。

③ 学習者を正當に評価する目

ラボの教師は、学習者の能力を決めつけたり否定したりせず、一人の大人として尊敬の念を持って接しており、学習者の可能性を信じる姿勢の重要性を学んだ。また、学習者のバックグラウンドは様々なので、別々の学習者を同じ基準で評価しないということを学んだ。

④ 学び続ける力

実習の際にお世話になったラボの校長先生の黒崎先生が仰っていたように、「日本語教師は学びが終わらない仕事だ」と強く感じた。教え方に完璧なマニュアルや正解はないので、失敗・成功を積み重ねて、あらゆる面で内省を積み重ね、自分なりの教師軸を確立して磨いていくことが大切だと学んだ。

【教師と学習者の関係】

ラボにおいて学習者はあくまでもインストラクターとしての立場である。学習者個人で異なる意図や考えをしっかりと配慮して、近すぎず遠すぎずの程よい距離感から学習者にアドバイスをする存在だ。また教師と学習者というように立場は異なるが、日本語教師は学習者と共に頑張る人でもある。

そして日本語教師は学習者を尊敬し、対等な関係であることを認識することも大切だ。教師と学習者の間に信頼関係を築くことは、お互いにとって大変重要なことである。教師もクラスメンバーの「一員」であることを忘れてはならない。

【日本語教師の仕事とは】

① 学習者の持つ能力を引き出す仕事

ラボでは、それまでに覚えた日本語を使って実践に近い活動をする授業が多くあった。また、学習者が日本社会で自立した豊かな生活ができるために、日本語を身につけるだけでなく、日本の社会や文化と適応できる力を養うことにも力を入れていた。日本語教師は学習者が日本語を覚えることではなく、日本語を使いこなして何かを達成できることを目指す仕事だと分かった。

② 学習者と向き合い、目標に導く仕事

ラボの教師は、教室内の仕事だけではなく、学習者の生活や進路の相談、教材探しなど、教室の外での指導も積極的にしていた。日本語教師とは、学習者のインストラクターという立場で、学習者の目線にたち、一人一人の学習者にとって何が大切なのか見極めて、目標までサポートする仕事だと分かった。

③ チームとして支え育成していくこと・学校全体を良くしていくこと

授業が始まる前などに、先輩の教師が後輩の教師の指導やアドバイスをしている場面も見ることができ、日本語教師の仕事は学習者に対する仕事だけではないという気付きがあった。より良い教師、より良い環境づくりが、より多くの学習者の学びや意欲に繋がるのではないかと考えた。



◆ ラボ日本語教育研修所 ◆

後期チーム

石川有彩

岩下晋子

片山萌

内藤そよ香

西村愛

埴あすか

引地かおり

吉田美祈

ラボ日本語教育研修所（後期） 実習報告

石川有彩
岩下晋子
片山萌
内藤そよ香
西村愛
埴あすか
引地かおり
吉田美祈

1. 概要

期間：2020年8月24日（月）～ 9月24日（木）

時間：9:15-13:30 もしくは 13:15-17:30（オンライン参加の場合もあり）

場所：ラボ日本語教育研究所（新宿区西新宿6-26-11 2F）

担当：黒崎 誠先生

実習内容

①ガイダンス：8月21日（金）14:00より

実習内容についての説明、日程の確認など。

②参加クラス：それぞれの期間中、クラスの授業に参加し、「授業記録」を作成する。「授業記録」は、翌週来校時に事務局へ提出する。

③実習内容：1週間に2日ずつ授業を見学する。週ごとに異なるレベル（初級、中級、上級）のクラスに参加することとし、原則として対面とオンラインの両方に参加する。各週は以下のように進める。

1日目・・・授業見学

2日目・・・授業に参加（学生として、もしくはチューターとして）

④自己評価：スケジュールがすべて終了した後に「振り返りミーティング」を行う。

⑤振り返りミーティング：9月30日（水）14:00より

2. 授業内容

【オンライン授業】

ラボでは、コロナ禍の影響により、対面だけでなくオンライン授業を導入している。

4、コロナ禍によるオンライン授業の導入②

□メリット

- ・ ホームページが作られたことによる、自習や復習の充実→欠席してしまっても取返しやす
- ・ オンライン面接の練習ができる
- ・ 助けてほしかったら自分で言うしかない
→「なんとなく」で進まない



□デメリット

- ・ 学習環境の個人差
- ・ オンライン授業が苦手な学習者もいる
- ・ 学習者の状況が理解しづらい



図1

<オンライン授業のメリットとデメリット>

メリット

- ①ホームページが作られたことによる、自習や復習の充実
→欠席してしまっても取り返しやす

オンライン授業の導入によるメリットの1つ目は、ホームページが作られたことによって自習や復習が充実したことだ。ラボは、今回のコロナ禍になるまで学習者用のホームページがなかった。今までのラボの対面の授業では、その時ホワイトボードに書いて説明する形であるため、その後に学習者の手元に残るものはほとんどなかった。また、遅刻や欠席をすると、その授業を学習者が取り戻すことは困難であった。しかし、オンラインになってホームページが作られたことによって、遅刻したとしても後から動画を見て自習が出来たり、復習する時にも学習者にとって便利になった。他にも、ホームページには練習問題などもあり、学習者はいつでも解くことができるため、授業がない休日にも以前より充実した学習をすることができる。

- ②オンライン面接の練習ができる

メリットの2つ目は、オンライン面接の練習ができたりするなど、新しい社会のシステムにも対応することができることだ。ラボのオンライン授業では、面接の授業もあり、オンライン授業で面接の練習をするときは、オンラインでの面接を想定して、学習者にカメラへの映り方や視線なども指導していた。

- ③助けてほしかったら自分で言うしかない
→「なんとなく」で進まない

3つ目のオンライン授業のメリットとして、なんとなくで授業が進まない、ということも挙げられる。オンライン授業では、学習者が学習中に躓いたり、わからないことがあると、自ら先生に助けを求めるしかない。そのため、疑問に思ったことをそのままにせず、なんとなくで授業が進むことがない。

デメリット

①学習環境の個人差

オンライン授業のデメリットの1つ目は、学習環境に個人差があることだ。Wi-Fiなどのインターネット環境も学習者によって様々で、自宅にWi-Fiが完備された学習者もいれば、自宅のインターネット環境が不安定な学習者もいる。インターネット環境が不安定な学習者には、ラボに来校してラボのパソコンでオンライン授業を受けるなどの対策がされていた。

②オンライン授業が苦手な学習者もいる

2つ目のデメリットは、オンライン授業が苦手な学習者もいることだ。オンライン授業が苦手な学習者は、zoomで顔を非表示にし、発言も少ないため、反応がわかりづらい。オンライン授業において、教師は画面から学習者の情報を得ることしかできないため、顔や声を非表示にされると学習者の理解度をわかる術がなくなる。また、学習者にとっても、オンライン授業自体に参加しきれないことで、教師とコミュニケーションが取れず、教師からのフィードバックも受けづらくなるため、日本語の学習に影響があると感じた。

③学習者の状況が理解しづらい

3つ目のデメリットは、先生が学習者の状況を理解しづらい点だ。読解技術の学習において、教師が学習者の理解度を知るために、長い文章の中でどの文に線を引いているかを見ることが大切であるにも関わらず、オンライン授業だと、学習者がどこに線を引いたかがわからない。また、授業の途中で寝てしまって、zoomに戻ってこない学習者がいたりするなど、オンライン授業では、対面の授業の通りにはいかない部分が多々あると感じた。

【初級午前】

<クラス情報>

- ・学習者：4名
- ・国籍：モンゴル、ベトナム
- ・特徴：新聞奨学生のクラス、まだ書き取りを苦手としている学習者が多い。控えめなクラスの雰囲気。

<授業について>

この初級クラスでは、オンライン授業と対面授業どちらでも場面シラバス形式で授業が行われており、教師が説明をするインプットの割合がアウトプットよりも多く感じた。初級クラスでは、文法などインプット多めの授業はオンライン、活動的な授業やテストは対面で行うように授業スタイルを使い分けていた。

9月8日（火） オンライン授業

9:15-12:30 文法

「機械の説明書を読む」という場面によく出てくる自動詞・他動詞などの語彙や、「～たり、～たり（ex. 付けたり消したり）」、「～とき（ex. あついとき、外へ行くとき）」という文型の導入と練習が行われていた。動詞の辞書形・普通形の確認や、助詞、過去・非過去の確認がなされていた。クラスホームページ上の解説動画や、zoomでの先生の説明、Google formを用いた練習問題など、様々な媒体で繰り返し発話練習と解説が行われていたことが印象的であった。

9月11日（金） 対面授業

9:30-11:50 文型を用いた 会話練習

「職場でやり方を聞く」という場面で、相手にアドバイスを求めることを行動目標とし、疑問詞を用いた文型の練習や、「Vておく（ex. しておく）」や「〇時までV」などの文型練習が行われていた。オリジナルテキストの会話ダイアログを確認した上でCD音源を聴き、例文の聞き取り確認と発話練習が行われていた。学習者に合わせて、学習者が苦手としていた動詞の可能形や丁寧形などの活用形の確認が多くなされていた。学習者が分からない語彙がある場合、先生は語彙の説明やイメージを伝えた後、「検索してごらん」と、学習者自身のスマートフォンの辞書機能や検索機能を用いて語彙を調べてさせていたことが衝撃的であった。

12:00-12:30 漢字練習

読みと書きのプリントを用いて漢字学習をする。読めているのに書き間違いをしてしまった学習者がおり、ただ書き間違いを訂正するのではなく、学習者はどこまで理解していてどこが苦手としているのかを教師が理解して導くことが大事だと感じた。

また、参加した日はできなかったのだが、授業時間に余裕がある時は、ここで練習した文型を用いて、実際にラボの先生にコピーの取り方を聞きに行くという実践練習も行うこともあると伺った。

他のレベルクラスと比べて、初級（午前）クラスではオンライン授業、対面授業どちらも、繰り返しの練習・確認・復習が多くなされていたことが印象に残った。

<見学の中での学び>

○「外」での日本語使用を意識した授業が行われていたこと

初級というと、「みんなの日本語」の教科書のように、文型をテキスト通りに学んでいく授業が想像されやすいが、ラボでは、実際の生活の場面でよく出てくる日本語を学んでいた。初級クラスの段階であっても、場面シラバスの授業内容や、スマートフォンでの語彙検索、実践練習など、すぐに日本語学校の外で使える力を養っていることが印象的であった。

また、先生は「やさしすぎない日本語」を使っていた。実際の日本語の会話スピードに慣れるために、先生は授業中もほぼ日常会話のスピードで話していた。基本はひらがな板書だが、「病院」や「予約」など生活の中で目にしやすい語彙は漢字のまま板書されていた。

○学習者に合わせた臨機応変な授業展開が必要であること

10を教えるときに、10の知識だけだと教えきれないため、50や100の準備や知識を持ち、授業に臨むことで、目の前の学習者に合わせた、学習者のための授業が行えると学んだ。また、学習

者の苦手項目の練習に時間を使ってしまい、用意した授業内容が全て行えないと感じた時、すぐに授業内容を短縮させる潔さや対応の速さも、授業を行う中で必要な力だと考える。

【中級午前】

<クラス情報>

- ・学習者：4名
- ・国籍：中国、モンゴル
- ・特徴：新聞奨学生のクラス、12月にN3の試験を控えている。積極的に発言しており、活発な雰囲気。

<授業について>

9月15日(火) 対面授業

9:15～10:05 発話表現

「～していただけませんか」「～してもいいですか」の文型を学習した。学習者にとってはこの二つの文型の使い分けが難しい様子で、先生はジェスチャーなどを駆使して教えていた。

10:15～11:05 聴解、四文作文

上記の文型が扱われる聴解問題に取り組んだ。実際にJLPTの試験で出題されたことのある問題で、本番の試験ではどのように聴解問題に臨んだら良いかなどのアドバイスも交えながら進んでいった。問題の音声は速い上に一度しか流れないので、学習者たちはかなり苦戦しているように見受けられた。

聴解の後は、「～してくれた」の表現を用いた四文作文に取り組んだ。学習者が「親切だと思う人」について、その人はどんな人か、自分に何をしてくれたかを四文で記述する。書いた作文を一人ひとり発表し、簡単な質疑応答の時間も設けられた。

11:25～12:35 読解

中心文の探し方を学習した。段落の中で最も重要な文はどこに書かれているか、といった文章を読む際のコツをつかみ、JLPTの試験などで効率よく解き進められるようになるのが狙いだ。また、接続詞を用法ごとにグループ分けしたプリントが配布され、接続詞に注目して読む練習も行われた。

9月27日(木) オンライン授業

9:30～10:40 語彙

「語彙ドン！」というテキストを用いて学習が行われた。学習者は一度ZOOMを退室し、クラスのホームページに掲載されている解説動画を視聴し、指定の時間にZOOMへ再入室して全員で意味の確認などを行った。

10:40～12:10 作文

前週の作文の修正と、今週の作文の練習を行った。作文の技術を毎週一つずつ学習しており、この授業では「理由」の書き方を学んだ。いくつかの例文を用いながら理由を表す接続詞の使い

方を練習した後、ZOOMを退室してそれぞれ作文の課題に取り組んだ。今回の作文のテーマは「Facebookでラボをお勧めする」というもので、「～から」「なぜなら～」を使ってラボの魅力を紹介する文章をノートに書き、写真に撮って先生にメールで送った。

12:10～12:30 語彙確認テスト

Googleフォームで用意されている語彙の確認テストを、満点がとれるまで繰り返し解く。

<見学の中での学び>

○丁寧に、確実に

漢字圏と非漢字圏の両方の学習者が参加しているクラスなので、学習者の得意分野にも偏りがない分、一つ一つの学習項目を丁寧に、確実に進めるよう心がけていると教えてくださった。また、インプットや練習をした際にはその都度アウトプットの機会を設けることで、学習者がどれだけ理解できているか、使えるようになったかを明確にしていた。このようにすることで、学習者がつまづいたところを放置してしまうことも防ぐことができ、速くて確実な習得につながることを学んだ。

○学習者の積極的な日本語使用

中国人とモンゴル人とで会話している様子もよく目にしたが、モンゴル人同士でも日本語で会話しているのを見かけた時は非常に驚いた。私が他の日本語学校に訪れた際は、学習者の出身に偏りがあったことも影響しているのか、日本語以外での会話が目立っていた。授業中だけでなく休み時間なども積極的に日本語で会話している姿が印象的で、ラボの学習者のレベルの高さは積極的な日本語使用にもあるのではないかと考えた。

【中級前期】

<クラス情報>

- ・学習者：7名
- ・国籍：モンゴル、アゼルバイジャン、シリア
- ・特徴：積極的に発言しており、活発な雰囲気。

<授業について>

9月1日（火）オンライン授業

13:40～13:50 漢字の小テスト

読み5分、書き5分の小テストを行った。早い人は5分で解き終わり、遅い人は8分ほどの時間がかかっていた。全員が終わると先生が回収した。

13:55～15:15 会話

「苦情を言う／謝る」をテーマに会話の学習をした。主にプリントを使い「苦情」についての説明や、「苦情」の言い方、言われた時の謝罪の仕方などを学んだ。その際、先生は学習者に苦情を言われたことや言ったことがあるかなどを質問し、会話を膨らませていた。実際に、学習者

は隣の部屋の人に子どもの声がうるさいと苦情を言われたことや、ルームメイトが深夜に大きな音を出すので苦情を言ったなど、日本での生活で苦情を経験してきた。

15:25～16:00 会話ロールプレイ

2人1組でロールプレイを行った。ペアにはそれぞれシチュエーションが与えられ、1人は苦情を言う方、もう1人は言われる方に分かれて自分で2分間でセリフを考え発表していた。その後先生やクラスメイトから感想やフィードバックをもらっていた。シチュエーションの例としては、雨の日の電車内で座っていると座席の前に立っている人の傘があたり服が濡れたとき、など日常生活でよくあるものだった。

<見学の中での学び>

○先生の学習者への接し方

先生は常に明るく優しい雰囲気だった。相槌をわかりやすく打つ、ジェスチャーを多く取り入れながら話す、学習者の発言をよく聞き拾いあげるなどのアクションが見られた。それにより学習者が自分の発言に自信を持ち、授業に臨むことができていると感じた。

○視野を広げること

予想外の質問を学習者からされることがあるため、日々の分析や授業前の準備が非常に重要だと感じた。その他にも、常にアンテナを広く張り様々な方面に視野を広げ情報を得る努力も必要だと学んだ。

○メリハリをつけた授業

対面授業後に先生にお話を伺うと、「ただ褒めることが良いことでは無い」とおっしゃっていた。日本語教師として学習者の成長を褒めることも大切だが、社会に出た時に会う日本人が学習者の日本語や行動をどう見るかということを考え、甘やかさず注意すべきところはきちんと注意し、メリハリをつけた授業を作ることが大切だと学んだ。

【中級中期】

<クラス情報>

- ・学習者：7名
- ・国籍：モンゴル、ベトナム、中国
- ・特徴：オンライン授業時のみ2クラスにレベル分けされている。

<授業について>

8月27日(木) 対面授業

9:30～10:20 文法

宿題の文法プリントの答え合わせと解説を行った。プリントには7つの文型があり、文章の空欄をその文型を使いながら正しい順序通りに言葉を入れていくという宿題だった。文型が多く、かつ、似たようなものもあったため、学習者は苦戦しながら解いたことが伺えた。

10:25～12:55 メモノート作成・漢字テスト

この授業では、得た情報の内容を大きく分け、分けた内容それぞれに項目を立てて各項目に情報を入れていくという「項目立て」文章作成を練習する授業であった。

まずはじめに「項目立て」の文章の書き方を先生が説明し、次に学習者が「項目立て」文章を書く練習を行った。その後、学習者は約1分間のビデオを複数回見て実際に項目を立てながら文章を作成した。ビデオでは、ある動物を紹介しており、その動物の生息地や身体的特徴などの情報を項目立てて書き、一目見ただけで何が書いてあるか分かるようにしなければならなかった。この活動は、ビデオを見るときだけでなく人の話を聞いたり文章を読むときにも役立つものだと感じた。

項目立ての文章を書き終わり、提出した学習者から漢字テストに取り組む。2枚合格すれば出席扱いとなるので、学習者全員が合格を目指し頑張っていた。

<見学の中での学び>

○日本で生活できるようになるための授業

中級中期クラスの授業内容は難しいと感じその点を先生に伺ったときに「できるレベルではなく、できてほしいレベル設定にしてある」と教えていただいたことが挙げられる。このことから、ラボは「テストに受かる」ようにではなく、「日本で生活していける」ように授業を行っていることがわかった。

○「飽きさせない、退屈させない」授業

見学を通して、ラボは「飽きさせない、退屈させない」授業を常に心掛けているとわかった。授業では、「読む・聞く・書く・話す」だけではなくビデオを使ったりすることで「見る」ということも一つの力として養っているのだと分かった。授業の終わりには、学習者も見学者である東女生も授業時間があっという間に感じていたことが伝わってきた。

【中級後期】

<クラス情報>

- ・学習者：7名
- ・国籍：アゼルバイジャン、シリア、モンゴル、ベトナム
- ・特徴：国籍や母語が様々であるため、休み時間は日本語でコミュニケーションをとる姿が見られた。文法・語彙に加え、知識・技術の習得を目指す。最終目標は、日本語能力試験N1合格である。

<授業について>

9月15日（火） 対面授業

メモノート

学習者は映像を見て、時間軸に基づき、どのような内容だったか登場人物や出来事をノートに記入する。見学した授業では、「まぬけな銀行強盗」を特集したテレビ番組を視聴した。

図2は、「まぬけな銀行強盗」を例にしたメモノートの活動である。青色は中級中期クラスで既に学習している活動である。この中級後期クラスではプラスαとしてBの部分、赤色で囲った部分を重点的に学んだ。たとえば、銀行強盗の映像だと、Aでは「お昼ごろある男が銀行に入っ

た。銀行員に銃を向けた。」が出来事としてある。そしてBでは、その男の周りの人物にも注目し「銀行員は慌てて男にお金を渡した。」などを書くことができる。中級後期クラスでは、物語の主人公以外に注目をし、時系列に沿ってどのような出来事があったかを書き出す力が求められる。

日本語母語話者であっても映像を一度見ただけでは、正確に書き出すことは難しい。学習者は何度も見返し、重要部分では停止しながらメモノートの活動を行っていた。

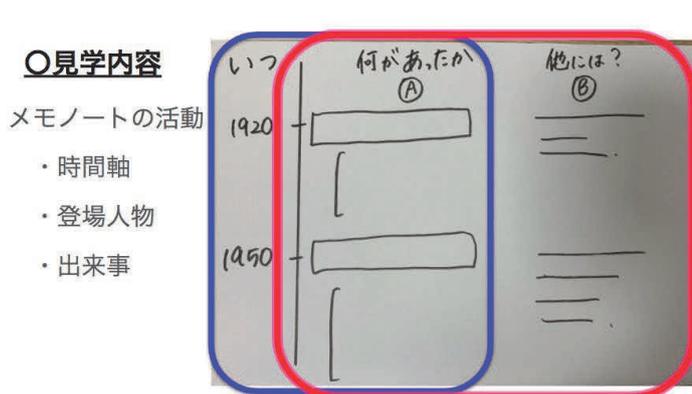


図 2

<見学の中での学び>

○生教材の使用

紙媒体の教材だけでなく、私たちが普段見るようなテレビ番組が教材として使われており、このような生教材は、内容の自由度も高く、学習者は楽しく学習している印象があった。

○教室だけでは終わらない、終わらせない教授法

メモノートの活動のように、「書く」授業では、自分の力でまとめる能力を磨く授業展開が印象的であった。進学希望の学習者は、今後講義の際などまとめる能力が求められる。また、就職する学習者にとっても、仕事内容や上司の言葉などノートやメモをとる機会が多くあることが想定される。さらにそれらは、願書や履歴書を書くことを意識し、手書きで行われていた。だれが見ても読みやすく、好印象を与える日本語の書き方の練習にもなっているようだ。このように、常に生活や卒業後を意識した活動が印象的であり、日本語学校は「ただ日本語を学ぶ」だけではないと改めて気づくことができた。

【上級】

<クラス情報>

- ・学習者：6名
- ・国籍：ベトナム、韓国、アゼルバイジャン、タジキスタン
- ・特徴：文法よりも語彙に関する質問が多く、学習者の差は語彙量であるようにみられる。アウトプットの比重が高い。

<授業について>

8月26日(水) 対面授業

9:30~10:30 漢字テスト

テスト前に10分間の復習時間が設けられ、学習者たちは各々のやり方で勉強していた。上級漢字「でる順」漢字問題3000題より出題。読み・書きで裏表のテストであった。これにより、漢字圏の学生は両面、非漢字圏の学生は片面といったように分けられるようだ。

10:30~13:05 大テスト

①漢字・語彙、②読解の二部構成で、時間制限はなく出来た人から帰る。日々行う小テストはスピードを、大テストはスピードに加え精度、思考力を試す目的があるそうだ。そのため大テストでは空白は許されず、最終的にヒントを出してでも学習者の考えを書かせる。

8月28日(金) 対面授業

9:30~9:50 漢字 読みテスト

生教材を用いており、文章の中の漢字を読んでいくものであった。解けた人から先生にその場で丸付けをしてもらう。漢字テストを終えた後は、先生が脳科学的に学習のヒントを話されており、学習者は興味津々といった様子であった。

9:50~10:10 新・漢字語彙

まず、プリントにある漢字語彙の読みを、辞書を用いたり学習者同士で話して書いていた。当てられた学習者はホワイトボードに読みを書き、その後全員で確認を行った。それぞれに先生の語彙説明が入り、学習者はメモをとっていた。

10:10~10:45 読解

長めの文章で、一人一行ずつ読んでおり、毎行先生の解説つきで、語彙は簡単に言い換えて説明されていた。似たような語がある場合はその違いについても説明することもあるようで、この日は「鮮明に」という語彙が「ハッキリと」とはどう違うかの説明がされていた。

10:45~12:20 インフォメーション・トランスファー

インフォメーション・トランスファーとは、読解や聴解でインプットしたものを自分自身で言語化・文字化し、音としてアウトプットする。この日は、まず文章を読んで3つにまとめ、発表し他者に伝え、その発表を聞き手の学習者が各自メモを取りながら、理解した内容に題名をつけるといった内容であった。同じものに取り組ませていただいたが、まとめる際の残す情報の選び方に苦戦した。学習者は、分かりやすいまとめ方や要旨を抑えた題名のつけ方をしており、「自分も勉強しなおした方がいいかもしれない…」と思わされるほどであった。言語は、ただことばが使えるというだけではないということを改めて実感する機会となった。

<見学の中での学び>

○日々学びを書き留める

これは、語彙の違いに関して簡潔にわかりやすく答えていらっしゃった先生から教えていただいたことだ。その先生は昔から違いが気になったことばをノートに書き留めていたのだそう。書き留めるという学びだけではなく、先生の授業外でも学びを楽しむ姿勢も見習いたいと思った。

○日本語学校は最後の砦

日本語学校は学習者がななあにしていたとしても諦めずに日本人が向き合ってくれる最後のチャンスの場ということである。これは、教員は「これはわかってそうだから飛ばそう」「早く進めたい」、「わかってあげたい」と思いがちだが、学習者の本当の理解に繋げなければ、今後学習者たちが日本社会で生きていく中で不利益を被る可能性があるためだ。担当の先生は「外に出たときにその人が自分らしく表現してそれが認められるように」との想いをもちながら、学習者に対して時には厳しく、その人の頑張りを認めながら向き合っていた。

【まとめ】

○学習者一人ひとりに合わせた臨機応変なサポート

ラボでは様々な国籍や背景・文化を持つ学習者があり、母語もそれぞれ異なるが、休み時間などでは教師や学習者の間で日本語を使用した活発なコミュニケーションが行われている様子が印象的だった。また、学習者の生活スタイルや得意分野・苦手分野もそれぞれ異なっているため、学習形式や授業内などで臨機応変な対応をすることで、学習者一人ひとりにあわせた学習のサポートが行われていた。

○授業内だけでは終わらない学習

学校の中だけで完結する活動やテストで点数を取るための学習ではなく、学習者の将来を意識した工夫や活動を行う場所が日本語学校であると学んだ。例えば、日常生活の会話のスピードや重要単語に慣れるための「やさしすぎない日本語」や、自分の力で要点をまとめる能力を養うためのメモ活動、コロナ禍でのオンライン学習導入によるオンライン面接を意識した活動など、教室を出た後の日常生活、更には学校卒業後や就職を意識した活動を取り入れることで、学習者が生きていくうえで役に立つスキルのサポートが行われていた。

○日本語教師と、日本人の目

授業内では日本語教師の視点で学習者を褒めるだけでなく、日本社会で生きていく中で学習者の日本語や行動はどのように見られるかを意識した指導もよく見られた。日本語学校の出来事を教室内だけで完結させず、社会として教室内を見ることが大切であると学んだ。

<共通理念>

○「日本で生きていくため」の日本語

ラボでのすべての授業に参加して、お手伝いした中で共通していると感じたことは「学習者が日本で生きていくため」の日本語を教えているということであった。「日本語学校は最後の砦」と先生もおっしゃっていたが、日本の社会で生きていくために、学習者一人ひとりとしっかり向き合える最後の場所が日本語学校である。ただ日本語を勉強するだけの場所ではなく、学習者の日常に必要なスキルや人間関係など、日本で生きていくための力を様々な角度からサポートを行うことが重要であると学ぶことができた。

3. 全体の気づき

実習前	実習後
日本語教師は「教える」仕事	学習者と教師、互いに学び合っている
教室の中で大人数で学ぶ	1クラス最大15人以内の少人数クラス
日本語の文型を教える	メモの取り方や、対人関係でトラブルを起こさない言い方など、日本で生活できるように必要な力をサポートする
一番上のクラスがN1を目指している	一番上のクラスは基本的にN1に合格しており、自分の思いや考えを自由に表現することを目指している
教師にとってハードでブラックな仕事	成長できる場と捉え、輝いていた学びを楽しんでいた
教師は「クラス」のために	教師は「学習者個人」のために
遅刻をした学習者には教師が授業後に連絡する	遅刻している学習者一人一人に、先生が授業中に直接電話をかける
日本語を日本語で教える	授業内では非言語コミュニケーションも重要視されていた

4. 印象的だった先生方のことば

ことば	意味・背景
「日本語教師の目と日本人の目」	日本語教師として学習者の日本語の成長を褒めることも大切だが、日本人として学習者の言動を見て、注意すべきところは注意することが大切。
「日本語学校は最後の砦」	日本語学校は学習者がなあなあにしているも諦めずに一日本人が向き合ってくれる最後のチャンスの場合。

「答えはひとつではない」	学習者は「答えの書き方はなんですか？」と聞きに来るが、答えをすぐにみて覚えても自分の力にはならない。正解はひとつだけではないので、自分に合ったやり方を見つけたり、なぜこの言葉を使うのか、なぜこの書き方をするのかまで考えてもらうことが大切。
「やさしすぎない日本語」	日常生活や重要単語に慣れるために「やさしすぎない日本語」を使う。
「学ぶ＝真似ぶ」	学習者は、他の国の学習者の勉強法を真似てみることも大切。

5. 今後への活かし方

・日本語教育は「教室内」だけで行われているものではないと学んだ。今後、日本語母語話者以外の人と関わるが増えると考えられるため、「教室内」だけでなく「社会」として全体を見ていきたい。

・今後、必ず外国人と関わる時代になる。「多文化の社会で必ず起こるのは「衝突」である。それを解決するためには高次の知識を持たねばならない」（石井先生のお言葉）。黒崎先生は石井先生のこの言葉から、「まず聞いてみましょう。マジョリティの社会であることは変わらないのでマイノリティの声をきいてみようよって言える存在に私たちはなれるのではないか」とおっしゃっていた。そのような存在になりたいと思う。

・実習を通し、「完璧に」教える必要はないと学んだ。今後日本語学習者と関わる際は、「完璧」を求めすぎず、互いに理解しながら楽しめる関係になりたいと思う。

・黒崎先生は「感じたことを言語化、文字化していくことが大切」とおっしゃっていた。学んだことをそのままにしておかず、アウトプットすることで知識をより深く身につけていきたい。

◆実習を振り返って◆

個人レポート概要

フィールド実践を行うに際して、学生は個々の目標を設定し、実践期間中に振り返りのためのデータを収集した。実習終了後、各自の目標に照らしてフィールド実践がどうであったかをデータの分析をふまえて振り返り、レポートにまとめた。

レポートのタイトルと概要は以下のとおりである。

【学外実習：フィールド実践 B・C】

インターカルト日本語学校

● 石原杏美「学習者の学習目的達成に向けた日本語教育とは」

私がこの2週間の実習で意識していたことは、学習者と交流を深めそれぞれがどんな目的や目標を持って日本語学習に臨んでいるのか、また先生方がどんなことを意識して学習者に教えているのかなどを間近で見学し吸収するということだ。短い時間の中で学習者と交流を深めることは想像以上に大変だったが、積極的に話しかけることでそれぞれの抱えている思いに触れることができた。そしてそれらを知った上で、日本語教師の先生方の授業に参加させていただき、単に日本語という語学を教えることが日本語教育ではないと学んだ。どうすれば学習者が目標目的を達成できるのか、どうすればより理解しやすいのか、興味をもてるのか、日本での生活で必要とされていることとは何か、と言うようにあらゆる角度から一人の人生に関わり、支え寄り添うものが日本語教育なのではないかと学んだ。

● 荻原綾「授業形態とエピソード」

個人目標を「授業に参加して得たことを実習で生かせるようにする」と設定した。この目標を意識し授業に参加させていただく中で、先生方がエピソードトークを取り入れていることに気付いた。授業のフィードバックを通して、エピソード記憶として学習者さんが認知しやすくなるように心がけていること、また学習者さんが積極的に会話に参加できる話題としてエピソードを加えていることを教えていただいたのをきっかけに自身の教壇実習でエピソードトークを学習者さんとの会話練習に取り入れることを具体的な目標に掲げ、教案作成及び教壇実習に挑んだ。故に、実習を通して得たことを基に授業や日本語教育について、自身の考えを深めていきたい。

● 荻山奈緒「日本語教師に必要なもの」

私は、2週間のインターカルト日本語学校での教育実習を行ううちに、日本語教師に必要な2つのものについて自分なりに考えるようになった。1つ目は、学生との関係作りである。授業や休み時間中の先生と学生との様子をみたり、教壇実習を行ったりする中で、学生との関係が授業や学生の学びに影響することを学んだ。2つ目は、相手の言葉に興味を持って拾う力である。石井先生が日本語教育実習の授業の中でおっしゃっていた「学習者が『話したい、言葉にしたい』と思ったときに言葉をあげるように日本語を教える」という日本語の教え方に繋がるプロセスであり、

教壇実習ではその難しさを、身を持って知った。これらのことは日本語教育の現場に限らず必要なものであるため、この日本語教育実習を通じて、人として必要なものを学んだように感じている。

● 国場香苗「対面で行われる授業の利点について」

今回の実習では2週間全て対面で授業が行われたが、だからこそ気づいた発見やメリットが多くあった。授業内の様子としては、先生が学習者をよく理解し、クラスの雰囲気やうまく利用しながら授業を展開されていたり、板書やジェスチャーを効率的に利用し、間違いやすいような文法事項を視覚的に印象付けていたりした点である。授業外としては、休み時間に学習者から話しかけていただいたことや授業で扱った文法事項を使って質問をしていただいたこと、先生から直接フィードバックを頂けたことがある。また、教案の作成から教壇実習をするまでを実際に経験したこととその反省点を見つけることができたことも大きな経験であった。難しい情勢の中、対面で実習ができたことを感謝すると同時に、今回の貴重な経験を通して得たことを今後も忘れず、自分の人生に生かしていきたいと感じた。

● 水原優「日本語学校における日本語教師に必要な姿勢」

日本語教師に必要な姿勢の一つとして、「配慮」が重要だと考えた。内向的な学生には、耳を近くに寄せることで、小声でも発言しやすくする先生がいた。友達と会話するときには自然な日本語を使えなければ意味がないと考える学習者も多く、そういったことを考えてテストには出ないが、砕けた言い方も教えている先生もいた。日本語教師は、学習者を思って行動を起こすことが大切なのだと実習を通して考えた。個人目標の「学習者とコミュニケーションをとりながら、授業で学習者の理解が円滑に進むようサポートしていく」為にはどうすればいいのかについても述べた。実習で目標に向けて行動した際、休み時間や授業中に学習者が分からずに困っているときなどに、コツコツと話しかけて日頃からコミュニケーションをとることが大切だと学んだ。また、学習者は、明確な文法のルールを求めているので、ルールを明示して教えることが重要だと感じた。

カイ日本語スクール

● 石井さえ「日本語教育の場から見てきた日本人の今後の課題」

実習を通して、「やさしい日本語」を使うことは想像以上に難しいということを知ることが出来た。私は、日本語のネイティブであるため、どんな単語が簡単で、どのような文型が易しいのか全く分からないのである。授業で易しい日本語を習った時は、やさしい日本語を使えるだろうと勝手に思い込んでしまっていた。しかし、やさしい日本語を使えるようになるには練習したり、勉強したりする必要があるということを知った。私が自分で思う「簡単」が学習者にとっても簡単であると考えられることは自分勝手であったと思った。やさしい日本語は災害時に在留外国人がニュースや状況を知るために役立つということで知られている。しかし、今後は日本社会に

おける外国人の割合が増え、同僚やご近所の方として外国人と関わる機会があるかもしれない。そのような時には、日常会話でのやさしい日本語が使える必要があるのではないかと思った。学習者が日本語を学ぶだけでなく、私たち日本人もやさしい日本語を学ぶ必要があると思った。

● 大坂美和「オンラインに対応した現場の特長について」

教育実習以前の私は、オンライン実習は対面実習の代替案であると考えていた為、コロナウイスの影響でオンラインに変更になったとき、メリットに比べデメリットの方が多いのではないかと考えていた。しかし実際に実習を始めてみると、オンラインのメリットを大きく分けて3点見つけることが出来た。1つ目は、学習者の学習機会が増えたことである。2つ目は、学習者の平等性である。3つ目は、適度な緊張感を生み出すことが出来ることである。オンライン授業には対面授業に無い良さが、対面授業にはオンライン授業には無い良さが、それぞれあることを実感することが出来た。学習者の環境に合わせ、対面とオンラインを使い分けることで、良い学びの場を作ることが重要なのではないかと思った。

● 菊地音々子「日本語教育における多様な視点を持つことの重要性について」

日本語教育実習に参加するにあたり、立てた個人目標としては「様々な視点を持ち、取り組む」ということが挙げられる。具体的には、様々な国籍、年齢、職業の学習者のバックグラウンドをしっかりと考えながら実習に取り組む、ということである。この目標は、実際の日本語教育の授業内容とは少し離れてしまうものと見られるかもしれない。しかし、日本語を学習する外国人の方と接する上で、必要不可欠なものであると考える。実習に参加する中で、カイ日本語スクールの日本語教師の方々を見ていると、その点をしっかりと念頭に置いたうえで授業に取り組んでいるように感じた。簡単なことに見えるが、なによりも重要であり、自分が考えているよりも難しい目標であり、考え続けるべき目標だと感じた。

● 齊藤菜那子「多様な学習者と信頼関係を築くための日本語教師の役割」

信頼関係を築くための教師の役割として知識・授業研究・学級作りの三つの観点から述べる。知識の面では、学習者の背景や文化に寄り添えるように世界の街や国についての知識を学び続けること、日本の地域、文化そして歴史についても知識を深めることが求められる。さらに授業研究の面では、授業の中で行う活動の工夫とオンライン授業に対応できるように ICT 活用についての研究が必要である。最後に学級作りについて、学習者一人一人と向き合うことが大切である。授業方法を学ぶことができただけでなく、自分に足りないことを明確に実感できた。先生と学習者という関係性については学習者からの期待があらかじめ存在する。毎回の授業を通して学習者自身が成長できていると感じることが出来る授業を行うことが求められるのはもちろん、会話や活動を通して一人一人と関係を築いていく必要がある。すべての瞬間が信頼関係を築くための階段となることを自覚して積極的に学び、学習者と接しなければいけないと感じた。

● 古川桃子「届ける以上に、もらったものの方が多かった日本語教育実習」

実習を通じて「日本語のサポートをした」というより、私自身が学校、先生方、学習者の方から学んだことの方が多かった。何よりも1ヶ月間、本当に楽しかった。様々なバックグラウンドを持った学習者の方々と触れ合い、ディスカッションをすることも彼らの個性あふれる作文を添削することも、授業を受ける様子から各々の国民性を感じられることも、また現場の先生方の教授法を自身の目で見られたことも、すべてが楽しく、充実した1ヶ月だった。何よりも、学習者の方々と話す中で感じた彼らの努力。その積み重ねや歩んできた背景には多くの活力と刺激をもらった。私自身、どのような形かはわからないけれど、今後も日本語教育に携わっていきたい。改めて、この1ヶ月間の実習を通じて出会った方々に感謝したい。何よりも受け入れてくださったカイ日本語学校の先生方、そして学習者の皆さん、ありがとうございました。

● 古橋南美「日本語と向き合う機会」

普段感覚的に日本語を使っているため、自分の日本語について考える機会はこれまでなかった。実習のフリートークの時に日本語を喋ることがとても下手だと感じたことから、「日本語が上手いとはどういうことか」を実習のテーマの一つとした。サマーコースの授業で「～じゃないですか!」「～ですか!」は会話を続けたい、話したい気持ちを伝える効果があるという教師の説明を聞いて、「話すのが上手い」ではなく「伝えるのが上手い」ということではないかと考えた。今までは自分の喋りたいことだけ喋っていて相手に伝えようという気持ちがなかったことに気づき、どうしたら相手に伝わるかを意識することが大切であると気づいた。

● 三ヶ田梨乃「日本語を伝える難しさ」

私の実習目標は「TA (Teaching Assistant) として出会った学習者に適切なサポートをする」であった。しかし実習を通じてそれを50%しか達成できなかったと考える。理由はお金を払って日本語を学びに来られている方々のお時間を頂いた身として先生方のような的確な指導はできなかったように感じたためである。しかし未熟ながらも、この実習を経験し生の現場に触れ新しい知識を吸収する姿勢と傾聴力が身についたと考える。カイ日本語スクールで実習をさせて頂いた1ヶ月は、非常に充実した毎日であった。そして実習を経験して最も大切なことは「対話」であると学んだ。実習の回数を重ねる度に新たな発見をし、反省点も多くなったが生の現場の雰囲気に触れ毎回気が引き締まる思いであった。そしてこの経験と悔しさ、失敗を糧にこれからの生活や社会人として日本語教育に携わる機会があれば活かしていこうと思う。

● 山田桃子「日本語教育を通して他者と関わる」

実習を通して、日本語教師が学習者とどのように関わるのかを実際に学ぶことができた。クラスに合った工夫をして授業を作るためには、学習者のことを知り教師も学び続けなければならないと思う。様々な背景を持つ人と日本語学習の場で会話することは、多文化を尊重しながら自分の意見を表現するために重要な経験だと考えられる。学習者同士で質問しあうなど、コミュニケーションをとる授業が多く、学んだことを積極的に使える雰囲気作りも必要だと学んだ。今後の

多文化共生を考えるうえで、大学や実習での経験は貴重なものである。お互いに尊重し学び合う関係性を作っていきたい。

新宿日本語学校

● 大谷彩乃「主体的な学習を促す活動形態とは」

私は今回の実習で、初級と中級の2つのクラスを担当させていただいたことで、まず自己目標である「実際の授業を見て、具体的な授業の進め方を学ぶ。レベルによる学習者の理解度の違いを学ぶ」といった目標をより深く理解して達成できたと思う。また更に主体的な学習を促す活動形態とは何か考えながら実習を行った結果、レベルによって主体的な学習を促す活動形態は異なるだろうと考えた。まず初級のクラスでは場面シラバスを用いたグループワークを講義に取り入れるべきではないかと考える。次に中級クラスではある程度基本の文法は学んでいるため、内容の理解を他者と共有すること、具体的には習った内容を相手に説明できるようにすることや、インフォメーション・ギャップを持たせ互いに説明しあうなどより積極的な発言を講義の中で求めることで実際の会話や日本語仕様の場面に近い緊張状態を作ることができるのではないかと考える。

● 倉橋みなみ「日本語教師に必要なスキル」

実習を経験して、日本語学校の運営から日本語の指導方法、日本語教師に求められること等を実際に再確認することができた。特に、日本語学校の運営についてはこれまで意識したことがなかったが、日本語教師及び学習者にとって最も大切な部分であることを実感した。この経験から、自分自身の想像や経験の枠を超え、1つのことを広い視野で捉えるべきであると感じた。コロナ下で異例なことも多かった中、実際に現場で教師と学習者双方について理解を深められたことは有意義であった。

● 佐藤あおい「日本語教育の存在意義～多文化共生社会の実現に向けて～」

日本語教育現場での学びを通して、日本語教育が多文化共生社会の実現においてどのような存在意義を持つのかをテーマに実習を行った。社会の変化に伴い、日本語を学ぶ学習者は年々増加しており、家族単位で長期的に日本を生活環境とする人々が多くなってきている。また、学習者のニーズもよち多様で複雑化しており、学校や教師は柔軟に対応していく必要があると学んだ。実際の現場では、日本語を学ぶという単純な行為の枠組みに留まらず、生きる術としての日本語教育が行われていることを知ることができた。また、教師や学習者との関わりを通して、多文化共生社会の実現において日本語教育が存在する意義は、「世界と日本の架け橋」を生み出すためだと考えついた。この架け橋とは、紛れもなく「人」の存在だ。日本語教育を通して日本の心を学んだ学習者が世界中に存在しそれを伝播していく、これこそが日本の未来を明るく灯す光となるのだと考える。

● 芝沼晴香「学習者のための日本語学校」

行っている授業や日本語学校が学習者のためのものであることを念頭に置くことが大切である、ということを知った。日本語教員は、一つ一つの活動も単純にこなしていくだけの「作業」とならないように、どのようにしたら「学習者のためになる時間」となるかを常に考えなければならない。当然のことであるが、実際に授業に参加させていただくことで、改めて実感した。また、日本語教員は様々な角度からものを見ることが求められるため、日々多くの物事に興味を持ち学び続けなければならないと感じた。

● 田中朋子「学習者の理解を促進する授業形態と教師としての振る舞いについて」

「日本語学校で行われている授業を通して、わかりやすい教え方や学生との接し方、日本語教師としての振る舞いを学ぶ」という教師の行動に着目した目標を掲げていたが、実際の現場を振り返り、学んだことは大きく分けて2つあると考えた。1つ目は、学習者の理解を促進する授業形態についてである。授業見学などを通して日本語学校の授業の特徴や一般的な日本の授業との違い、日本語を学習するための環境について学ぶことができた。特に授業内でアウトプットの機会が多くあったことが、日本語の習得に効果的だと感じた。2つ目は、日本語教師としての振る舞いについてである。担当してくれた先生の学習者への対応を見ることで、「学習者を否定しないこと」「学習者と真摯に向き合うこと」、「授業準備をしっかり行うこと」が重要なのだと学んだ。

● 水谷真莉菜「学習者の早期理解のためにすべきこと」

私は、日本語教育の現場を知る。そして、日本語の教育者として必要な実務スキルを学ぶとともに、学習者とのコミュニケーションを通して異文化理解を深めることで、教育者に求められる総合的なスキルを身につけることを目指す。ということを実習期間の目標として掲げていた。その目標を達成するため、自分から自発的に学習者とコミュニケーションを取るよう努力した。また、新宿日本語学校独自の教授法をできる限り吸収できるよう、自分も学習者とともに1から学ぶ気持ちで授業に臨むように努力していた。実習を通して学んだこととしては、学習者の混乱防止や、早期の理解を促すためには、テンポよくまとめて覚えさせること、学習したことを適度にアウトプットさせる機会を設けることも大切である、ということがよく分かった。

● 水野佑香「コロナ禍の日本語教育 オンラインと対面」

対面の活動とオンラインの活動併用の実習を経験したことで、対面の活動の意義をより感じられた。さらに、オンラインでの活動の実習では、学習者とのコミュニケーションの機会をしっかりと持つこともでき、オンラインの活動の難しさ・便利さもそれぞれを感じることもできた、コロナ禍ならではの活動となった。オンラインの活動の広がりや、新型コロナウイルスがきっかけであったこともあり、「対面だったらできるけど、オンラインだからできない／難しい」面が目立ちがちな中、オンラインの活動の利点にも触れることができたことは大きな収穫だった。コロナウイルス終息後も、対面の活動に加え、オンラインの活動も新たな手段として非常に有効なものとして活用できるのではないかと考える。本稿では、コロナ禍での対面・オンライン併用実習

の活動内容と一昨年から日本語教員課程の授業で学んできたことを照らし合わせての気づきを対面とオンラインという活動の環境に注目しながら述べる。

● 吉田理華子「日本語教育の実際の現場」

新学期が始まるタイミングでの実習であったため教室設営も行った。コロナウイルス感染拡大防止のために、通常とは異なる場面もあったが、学習者の座席の配置はコの字型とすると、学生同士がお互いの顔を見ることができ、会話練習が効果的に行えるという。教科書は、日本語の文法を教えるだけでなく、日本で生きていくための知識も同時に教えられる内容となっていた。私が見学した授業では、災害がテーマであり、地震が起きた時の対応についてなども教えていた。地震が起きた時の緊急交通路となる幹線道路にあるナマズの看板の理由がわかったと言っていた学習者が印象に残っている。また、母国に多い災害について聞くなど、学習者の発話から日本以外の国の文化や暮らしが感じられた。日本語教育の現場は日本語を教えるためだけの場ではなく、お互いの文化や考えの違いにも触れられる場だということを実感した。

ラボ日本語教育研修所(前期)

● 赤崎文音「自身も常に学び続ける存在である日本語教師」

『明日の教室』のためではなく、『もっと先を見据えた教室活動』をつくることを要素の一つとして求められているのが、日本語教師である。今年は covid-19 の影響でオンライン授業を余儀なくされた。そのように制約がある中で、いかに学習者にとって有用な教室を作り上げることができるか、学習者が教室を出て動的な社会で日本語を使用し、自己実現するために何ができるのか、それらを明らかにするために、教師自身が常に学び続ける必要がある。また実習を通し、実習生としての私にも変化がもたらされた。普段話す自身の言葉を気を付けるようになり、さらに相手にとって良い聞き手でいようという意識が生まれた。このように、私自身の言語運用を内省する機会となり、「日本語力」が向上した実習となった。

● 五嶋友香「『学び続ける日本語教師』とは」

実習に参加するにあたって「授業後、疑問に思ったことや授業に関することを担当教師に積極的に質問する」「これまで大学の授業で学んだことを踏まえた上で授業に参加し、理解を深める」という2つの目標を設定した。担当教師に授業内容のことや日本語教師のことなど質問していく中で、担当教師の「学び続ける日本語教師」という言葉が一番印象に残った。授業における「学び続ける日本語教師」と、学習者への指導及びアドバイスにおける「学び続ける日本語教師」について考えた時に、これまで大学で学んだこと以外の新たな視点で日本語教師について考えることができ、良い刺激となった。実習を通して、改めて日本語教師という仕事の奥深さを実感した。「学び続ける日本語教師」のように、今回の教育実習で学んだことを確実に将来に繋げていきたいと思う。

● 島貫このみ「日本語教師と学習者の関係について」

私は今回7月6日から7月31日の約一か月間、東京都新宿にあるラボ日本語教育研修所（以下ラボ）に実習生として授業に参加させていただいた。実際に日本語教室に訪問するのは今回が初めてであったため、現場の空気感や学習者と教師の距離感を実際に見て、日本語教師の役割についてより深く理解することを目標とした。ラボでは対面授業とオンライン授業に参加させていただき、授業の様々な場面で教師の工夫が見られた。ラボにおいて最も特徴的なのは、日本語教師とはあくまでインストラクターという立場で学習者を支える存在だということである。学習者と対等な関係で、共に目標に向かって努力をするクラスの「一員」であるとも言える。このような信頼関係を築くことはとても大切であり、そのためには教師自身の人間性や素直さも大切であることが分かった。

● 鍾嘉蔚「日本語教師の視点から」

この度、日本語実習でまた日本語の教育現場に参加できた。しかし今回は昔とは違い、日本語教師の視点から教育の現場を観察できた。そしていくつかのことについても振り返ってみた。例えば現場でしか実感できない授業のテクニックと授業の解説、さらに教材選びの工夫など、昔日本語学習者の視点と違って、新たな立場から見ることができ、考え方が大きく変わった。また、今回の実習をきっかけに、「日本語教師」だけではなく、「教師」として学習者との関係はどうあるべきかについて考える機会を得た。結論的に、日本語教師として大切なことである。今回の実習を振り返ってみると、日本語教師として最も大切なのは学習者に寄り添う心と学び続けることだと実感した。これからは今回の実習に得た経験を活かせることを願っている。

● 寺沢瑞希「他者に寄り添うことで生まれる多様な社会」

日本語学校は多様性に富んだ環境の中で学習をする場所であった。その中で、バックグラウンドが様々な学習者同士が、相手を思いやってコミュニケーションをとることの大切さを学ぶ機会に触れた。様々な語彙を持ち合わせていても、相手にきちんと伝わらなければコミュニケーションは成立しない。相手に寄り添い話すこと、これがコミュニケーションをとる上で大切だと感じた。また、教師は学習者を一人の人として敬い、ともに学び続ける姿勢を持ち続けることが大切であると感じた。教師が一方的に教えるのではなく、教師も学習者から学ぶことが沢山ある。私自身、学習者との会話の中で学んだことが多くあった。コロナウイルスの影響で世界が分断されつつあるが、今こそ、他者を思いやり、寄り添い、理解していくことが重要だと感じる。そうすることで、日本語学校のような、多様な人が溶け込みやすい日本社会を作ることができるだろう。

● 前川奈々美「日本語教師のあるべき姿勢とは」

実習の目標として教師に着目することをあげ、教師の学習者への対応や姿勢を考察し、教師は学習者に対してどのような姿勢でいるべきだろうかということ念頭に置きながら実習を行なった。学習者の目指すところは日本語学校の卒業ではなく、「卒業後のコミュニティで自分の個性や経験を生かし、自分らしく思いを表現すること」である。そのために教師は、どんな時も学習者

のためにという姿勢を崩すことはなかった。本論では、実習中の出来事を自分なりに考察し、「学習者に対する教師のあるべき姿勢」について述べた。そのような教師の学習者をリードする姿勢は、信頼関係を築ききっかけになる。そして、それは教師と学習者のより良い関係づくりに繋がっているに違いない。現在、日本では様々な地域や国のルーツを持つ人が多く暮らしている。このような多様化する社会において、人との関わりの中で相手を尊重し、自分から信頼関係を作っていく力こそが求められているはずだ。

● 吉田有里「学習者の視点に立った日本語教師の在り方」

実習を通して、日本語教師は学習者の視点を持つことを心がけることが重要だと学んだ。教師がどんなに多くの日本語の知識や授業作りの技術を持っていても、学習者に届ける様々な手段を持っていなければ、それは教師の一方的な押し付けになってしまう。教師の指導の一つ一つが学習者にどのように伝わるのかを常に意識し、いかに学習者に負荷がなく日本語を導入し、いかに自然な流れで日本語を使わせて定着を図るかという点に教師は多くの配慮をしなければならない。そして、学習者の視点を把握するためには、学習者の母国や性格、学習観、成績、授業での様子や発言などあらゆる面から学習者を観察する必要がある。これらの学びを通して、そもそも「教育」とは教師が学習者を変えようとするのではなく、学習者自身が自ら変わろうとすることを促すことではないかと考えた。学習者の持つ能力を信じ、適切な機会や場を与え、学習者の「自ら変わろうとする力」を最大限に引き出すような日本語教師で自分になりたい。

ラボ日本語教育研修所(後期)

● 石川有彩「日本で生きていくための学びの場」

コロナ禍の影響でオンライン授業が導入されたことによりオンラインと対面の授業を週に一回ずつ参加したが、その中ですべての授業に共通していたことは、学習者が日本で生きていくための力をつけることを意識した活動や会話である。例えば、卒業後の進学や就職を意識した進路サポートや、オンライン授業でのオンライン面接を意識した活動、人間関係や人付き合いを意識した活動、日常会話のスピードに慣れるための「やさしすぎない日本語」などが見られた。その中でも特に上級クラスで行ったアンガーマネジメントの活動では、クラスメイトにまつわる様々な経験やエピソードから他人の怒りについて学習者が予測・分析を行ったが、これは正しい語彙や文法よりも「他人を理解する」ことが目的であり、日本語学校の外の人間関係のサポートの意味もあると先生はおっしゃっていた。日本語を学ぶだけではなく、学習者が教室の外に出たときのための、日本で生きていくための力を学ぶ場所が日本語学校であると学んだ。

● 岩下晋子「オンラインを通じた日本語教育に関する学び」

今年にはコロナウイルスの影響もあり、わたしはラボ日本語教育研修所での実習をすべてオンラインで行いました。そこでレポートではオンラインで行う日本語教育について様々な観点から考

察しました。1章ではオンライン授業から得た学びを、2章ではオンライン授業と対面授業の比較を、3章では学習者に関する気づきを、4章では日本語教師に関する気づきを、5章では自らに関する気づきを、6章では実習前と実習後の比較について述べました。オンラインでの実習を通して、オンライン授業のメリットとデメリットを発見するとともに、オンライン授業でも対面授業でも、共通して大切にしている理念がラボ日本語教育研修所にあることがわかりました。

● 片山萌「日本で不自由なく生活する力を養うためには」

ラボ日本語学校の実習を通して、日本語教師は日本語をただ教えるだけの役割ではないと感じた。特にラボ日本語学校では、「学習者が日本で生活をするときに不自由なく過ごせるように」という想いのもと、「学習者のために何ができるか」という考えを大切にし、日本語学校の外の生活ですぐに使える日本語や、会話の中での礼儀やふるまい方、ノートのまとめ方などを指導していた。また、発話量のコントロールや、学習者の理解度の確認、レベルに合わせた課題など、学習者一人一人に寄り添える授業を行うための工夫を見ることができ、目の前の学習者に合わせて授業を行うことの大切さや大変さを感じることもできた。日本語教室や学校内だけではなく、社会と繋がっていることや、学習者の日本語学校外での日本語使用を意識して行うことが、日本語学校に必要な役割だと学んだ。

● 内藤そよ香「日本語教員のエッセンス」

本レポートでは、実習前に立てた目標である「日本語教員としての学習者に対する姿勢・接し方」を軸に、「実習前と実習後の変化」「日本語教員の共通点」「日本語教育とは」といった四つの観点で実習の学びを振り返った。実習期間中は、目標を意識して授業見学を行うことに加え、それぞれの先生方に日本語教員になった経緯や教員としてのテーマを伺うことで表面だけでは判断しきれなかった部分も掘り起こそうとした。反省として、先生方の教え方に圧倒され、自分が教員となったときにどう生かすかといった視点で見ることができていないことがあった。今後は、「完璧でなくても大丈夫だと信じ、肩の力を抜いて学びを楽しむ」という日本語教員のエッセンスを加え、もっと学習者に寄り添える人になりたいと思う。

● 西村愛「人対人のコミュニケーション」

今回の教育実習では、教師と学習者の関係性に注目することを個人のテーマとした。実習を終えて、「教師と学習者、日本人と外国人という関係性ではなく、人対人のコミュニケーションが大切である」と学んだ。もちろん、教室内では教える側がいて、教わる側がいる、この構図は変わらない。しかし「人対人のコミュニケーション」の姿勢を持つことで、学習者の文化やことば、考えの違いを受け止めることができる。さらに教師と学習者が互いにリスペクトし合う関係が築くことができるということを学んだ。このような姿勢は、日本語教育に携わる人のみならず、社会の一員として暮らすすべての人に大切な姿勢であり、どんな場面でも通じるものであるだろう。学部卒業後、ぐっと広がる社会の中でさまざまな出会いが予想されるが、ひとりひとりと真摯に向き合い、お互いにとって良いコミュニケーションを展開していきたい。

● 埴あすか「実習を通して生まれた『日本語教師像』の変化」

私は今回の実習で、授業見学や先生方との対話を通して日本語教育を柔軟に捉えられるようになることを目標とし、授業後の質疑応答の時間には、先生がどのような気持ちで日々の授業に臨まれているか、また日本語教師になったきっかけなどをできるだけ沢山うかがった。実習を通して最も印象に残ったのは、自分の中の日本語教師のイメージが変化したことである。先生方が常に学習者のことを気にかけて誠心誠意向き合っているところや、日々の授業を心から楽しんでいる姿が非常に印象的で、日本語教師という仕事の魅力に改めて気づくことができた。また、黒崎先生の「ラボの先生方は、この学校が自分が成長できる場所、自分を他の世界へ連れて行ってくれる場所だと思っているからここで教えている」ということばから、先生方の「ラボ愛」とはこういうことか、と納得した。今回出会った先生方や学習者のように、自分の目標に向かって努力し続けられる人でありたいと思う。

● 引地かおり「互いに学び合う日本語教育」

実習を通し今までの日本語教育に対してのイメージが変わった。大学で教案を作った際は想像以上に時間もかかり難しく大変だった。そのため、日本語教師の仕事は「教える」ことであり、大変な仕事だという印象が強かった。しかし先生は「毎回の授業で新しい気づきや発見がある」とおっしゃっていた。学習者から気づかされることや学ぶことも多い。日本語教師は「教える」だけの仕事ではないと学び、日本語教育には学習者と教師の「互いに学び合う姿勢」が非常に重要だと感じた。また、教室だけが日本語教育の場ではないと学んだ。今後、国内で日本語を母語としない人々と関わる機会は、増えていくであろう。今回の実習でそのような人々とどのように関わり、接していけば良いのか改めて考えさせられた。これから教師として教室に立つことはなくても日本で母語話者、学習者が互いに快適に暮らすことができる社会をつくっていきたいと思う。

● 吉田美祈「学習者の将来を考えた日本語学校とは」

私が日本語教育実習の個人目標にしていたことは、「授業中の教師と学習者の会話や発言をよく聞いて観察し、学習者にとって何が難しいのかを常に考える」であった。そこで、私は実習が始まった初週、学習者にとって難しいと感じた授業の内容を授業後、先生に質問するという意識で行っていた。実際に質問した際、ラボの先生は「できるレベルではなく、できてほしいレベル設定にしてある」と教えてくださった。このことから、私は授業のレベルを全て学習者に合わせてしまうと、いつまで経っても学習者の日本語力が伸びていくことはなく、むしろ、日本語力の伸びる機会を奪っているということに気づいた。また、「学習者に必ず合わせる」ということは結果的に「学習者が日本で暮らす生活力」にも悪影響を与えるということにも気づくことができた。いつか必ず関わりたいと考えている日本語教育の現場で、学習者の目先のことではなく将来のことを考えて学習者に接したいと改めて感じた。

2020 年度 日本語教育実習報告書

2021 年 2 月 1 日発行

編集・発行 東京女子大学 日本語教員養成課程

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

実習担当者 石井 恵理子・吉本 恵子

印刷 NPC 日本印刷株式会社

